第３編　道平（どうだいら）遺跡（２次調査）

遺跡略号　ＯＫ―ＤＤＲ
所在地　双葉郡大熊町大字大川原字西平
調査期間　平成16年９月１日～12月16日
調査員　松本　　茂・阿部　知己・坂田由紀子

第1章　調　査　経　過

道平遺跡は，『福島県遺跡地図』や『大熊町史』に登録・記載された周知の遺跡である。昭和55年には団体圃場整備事業に伴い，一部について試掘（予備）調査・発掘調査が実施され，縄文時代後・晩期の遺構・遺物が多数確認・調査された（図１参照。渡辺･大竹1983）。

以下では，発掘調査の概要の説明を簡単にするため，平成14年度の調査区を含めて，調査区に図２に示す名称を付した。あわせて，段丘面については，１～４区の立地する段丘面を上位面，６区のある段丘面を中位面，そしてさらに低い位置にある段丘面を下位面と呼称し，場所を示す表現として用いている。

本遺跡は平成８年度に実施された，常磐自動車道の建設予定地を対象とした表面調査により再確認され，その広がりは140,500㎡と提示された（福島県教育委員会1997）。平成14年５月には，常磐自動車道建設地内の一部7,800㎡を対象に試掘調査が実施され，4,500㎡が保存を要する面積とされた（福島県教育委員会1997）。このうち上位面南端のとした2,400㎡（第３編図２・４中の１区）を対象として，発掘調査が平成14年９月に実施された。この調査では，土坑４基と縄文土器･弥生土器等の遺物が500点ほど検出・調査された。

図１　道平遺跡調査区位置図

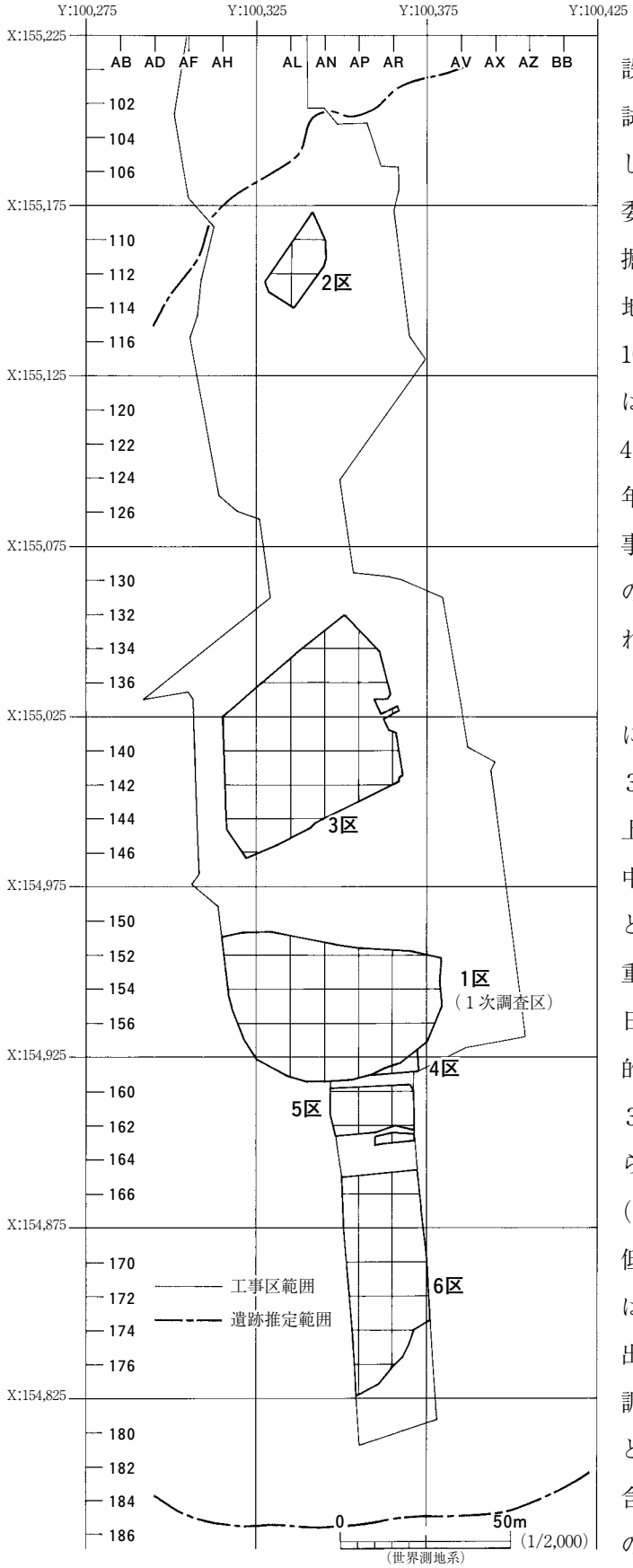


図２　調査区位置図，グリッド配置図

平成16年６月には，常磐自動車道の建設予定範囲内に残る13,100㎡を対象に，試掘調査を実施し，保存を要する範囲として5,800㎡が提示された（福島県教育委員会2005）。平成14年・平成16年の試掘調査で提示された，常磐自動車道建設地内における道平遺跡の要保存面積は10,300㎡である。平成16年度の発掘調査は平成14年度調査に続く２次調査で，4,510㎡を対象として実施した。平成16年度の発掘調査の実施にあたっては，工事優先箇所や条件整備ができていない等の要因により，細切れに調査区が設定された。以下，調査の概要を記す。

９月１日，上平Ａ遺跡の発掘調査終了に伴い，調査員１名を道平遺跡に移動し，３区とした上位面の中央と，４区とした上位面の南東端，５区とした上位面から中位面を区分する段丘崖の西半分，６区とした中位面の西半分をそれぞれ対象に重機による表土剥ぎに着手する。９月６日からは作業員も移動し，３区から本格的に遺構の確認・精査作業を開始した。３・４区は圃場整備によって削平されたらしく，表土下には基盤である黄褐色土（ＬⅣ）が堆積していた。遺構の密度は低いが，３区の南端を区切る道路際からは，フラスコ状の土坑が６基密集して検出された。６区は昭和55年に試掘・発掘調査が行われた段丘面と同じ面で，このときには埋甕や多量の遺物を含む遺物包含層が確認されている。しかし，本年度の発掘調査では，圃場整備の削平が基盤の礫層にまでおよんでいること，平成14

年の試掘調査で全面に広がると報告されていた，遺物包含層の大半が圃場整備に伴う盛土であることが確認された。基盤層の状態から，縄文時代後・晩期の遺構は，圃場整備に際して，その多くが失われたものと考えられる。なお，この盛土については，調査当初にはその性格が分からなかったことから，南北巾20ｍごとに表土を除去し，約１/４の表土について遺物採取作業を行い，包含される遺物の質と量について検討した。

10月には，２区と５・６区の東半分の発掘調査が決定し，10月中旬には再度重機を用いて，この部分の表土剥ぎを行った。これに継続して，３区から作業員を振り向け，遺構の検出作業を進めた。下位面と中位面を画する段丘崖際からは，削平を免れた遺物包含層が確認され，その掘りこみに着手した。遺物包含層やその周辺からは竪穴住居跡や土器埋設遺構も確認され，逐次検出遺構の調査に着手した。

11月中旬には，10月から相馬工区内の調査の応援に出向いていた調査員１名も合流し，遺物包含層の調査と周辺から検出された遺構の精査に専念する。この間，遺跡南端部の段丘崖際から，大川原川の流れる下位面にかけては，砂防指定地であることが明らかとなった。この部分については，工事許可の取得が必要とされ事務手続きを考えると，今年度中の発掘調査は困難であると判断された。このため発掘調査は次年度以降に対応することが，東日本高速道路株式会社・福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団の間で合意された。12月1日には，上平Ｂ遺跡の発掘調査の終了にともない，調査員１名が合流し，12月16日に平成16年度の発掘調査を終了した。

福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団と東日本高速道路株式会社による現地の引き渡しは，上平Ａ遺跡・上平Ｂ遺跡・道平遺跡と合わせて，12月16日に実施した。また，埋め戻しについては，関係機関の合意を得て，引き渡しに先行する12月14日から開始し，同月27日にこれを終了した。

検出した遺構は，竪穴住居跡６軒，土坑18基，土器埋設遺構１基，集石遺構１基，遺物包含層約200㎡と小穴で，発掘調査に要した延べ日数は59.5日である。平成14年度と平成16年度を合わせた，発掘調査面積は6,910㎡である。

（松　本）

第２章　遺 構 と 遺 物

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図３・４，写真１・２）

道平遺跡２次調査において検出された遺構は，竪穴住居跡５軒，土坑22基，土器埋設遺構１基，集石遺構１基と小穴で，平成14年度に検出された遺構を合わせると，遺構数は竪穴住居跡５軒，土坑26基，土器埋設遺構１基，集石遺構１基と小穴である。

平成14年度の発掘調査は，上位面南側の圃場整備が終了した部分（１区）を対象とした。その結

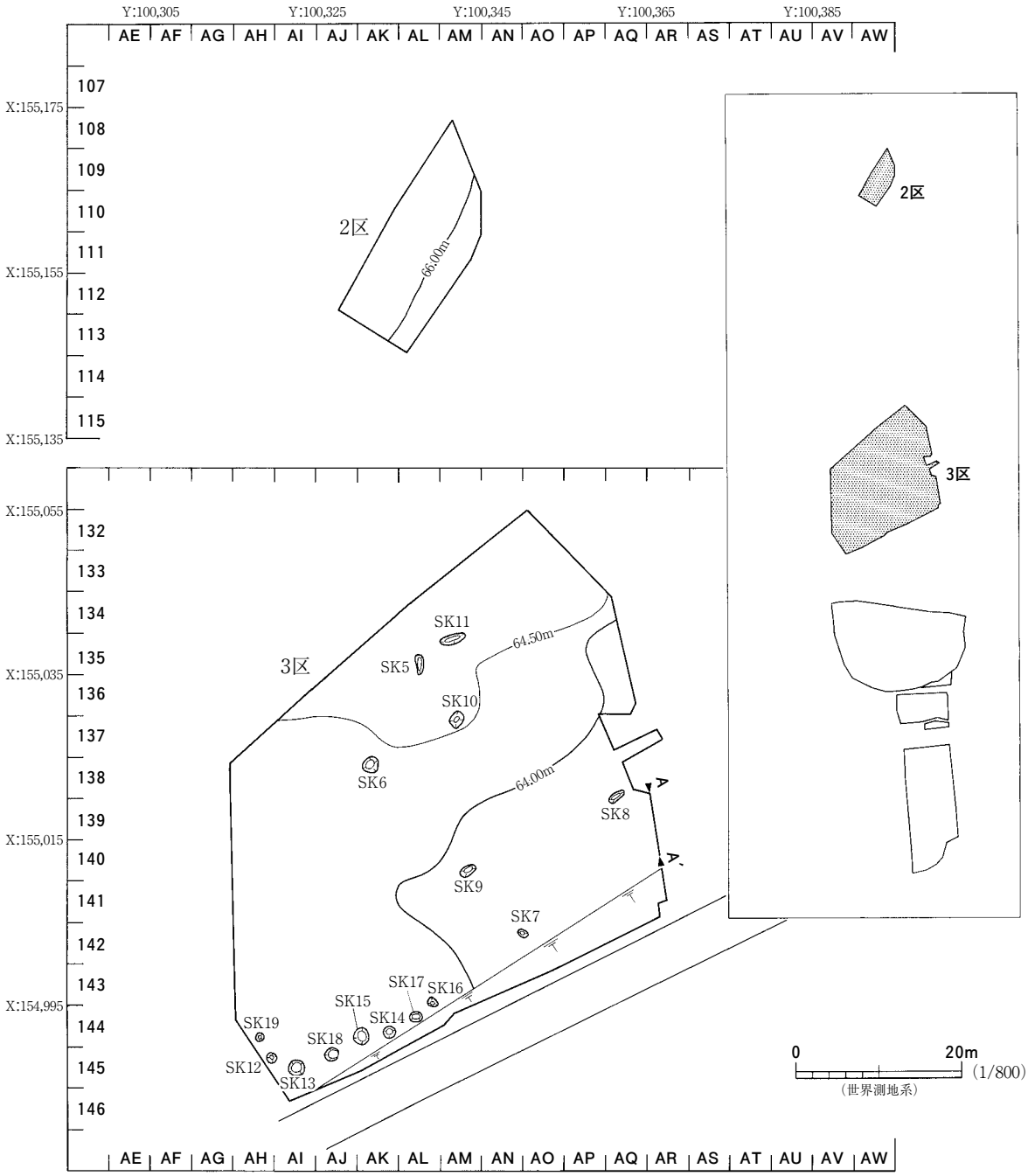


図３　遺構配置図（１）

果，縄文時代と考える土坑４基が確認された。平成16年度の２次調査は，圃場整備が終了した上位面２～４区，中位面６区，そして上位面から中位面を区分する段丘崖の５区を対象とした。上位面２・３区からは，遺構は確認できなかった。中位面６区からは，竪穴住居跡５軒，土坑７基，土器埋設遺構１基，集石遺構１基を確認した。上位面から中位面を区分する段丘崖の５区からは，ＬＩ中から縄文時代後期の深鉢形土器の胴部片を８片確認し，ＬＶ面において遺構は確認できなかった。

現状で，道平遺跡の占置する上位面・中位面上はほぼ平坦面である。中位面の６区の南縁付近では，南東から北西に向かって入る浅い谷があることが新たに確認された。この谷は集落が営まれた

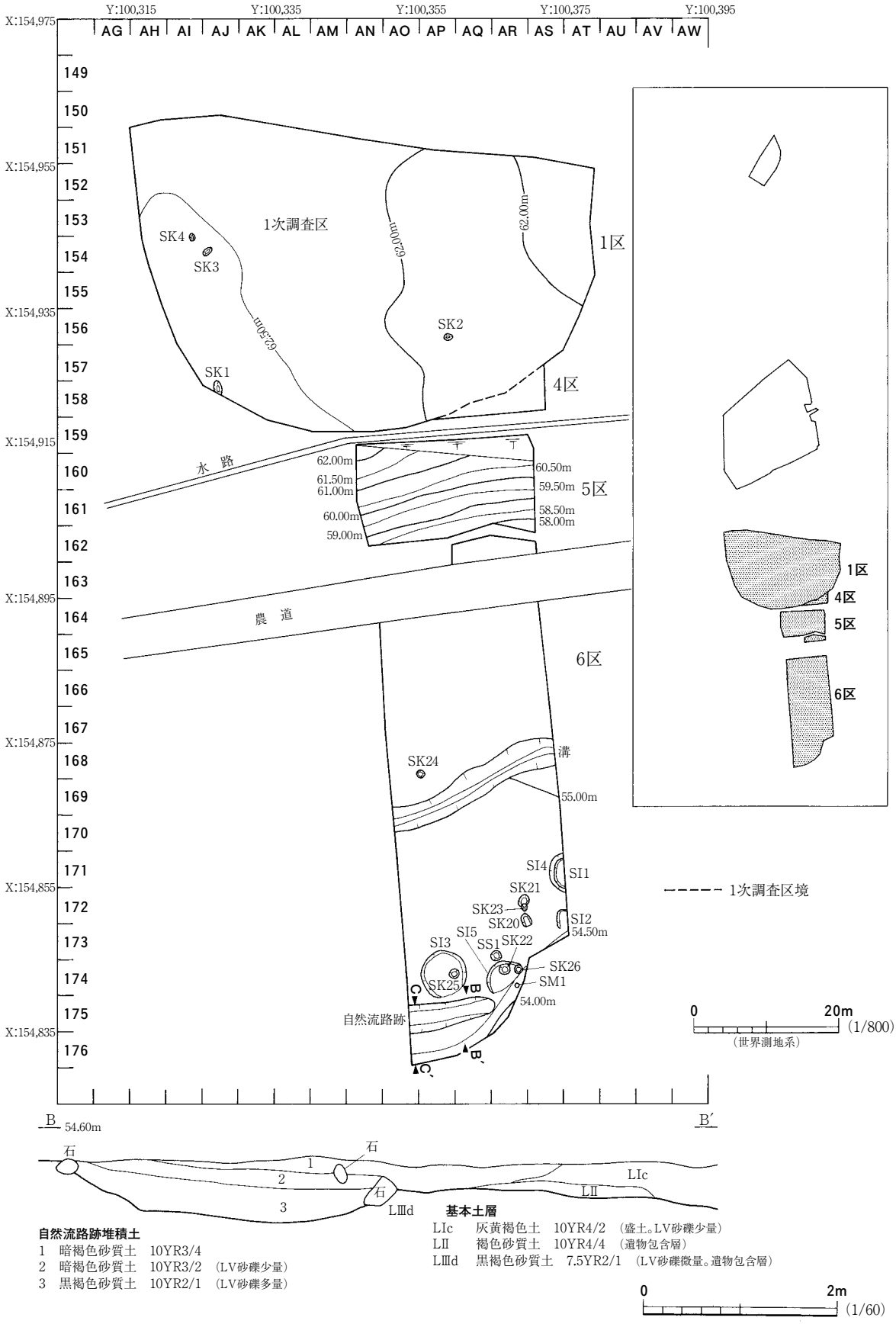


図４　遺構配置図（２），基本土層

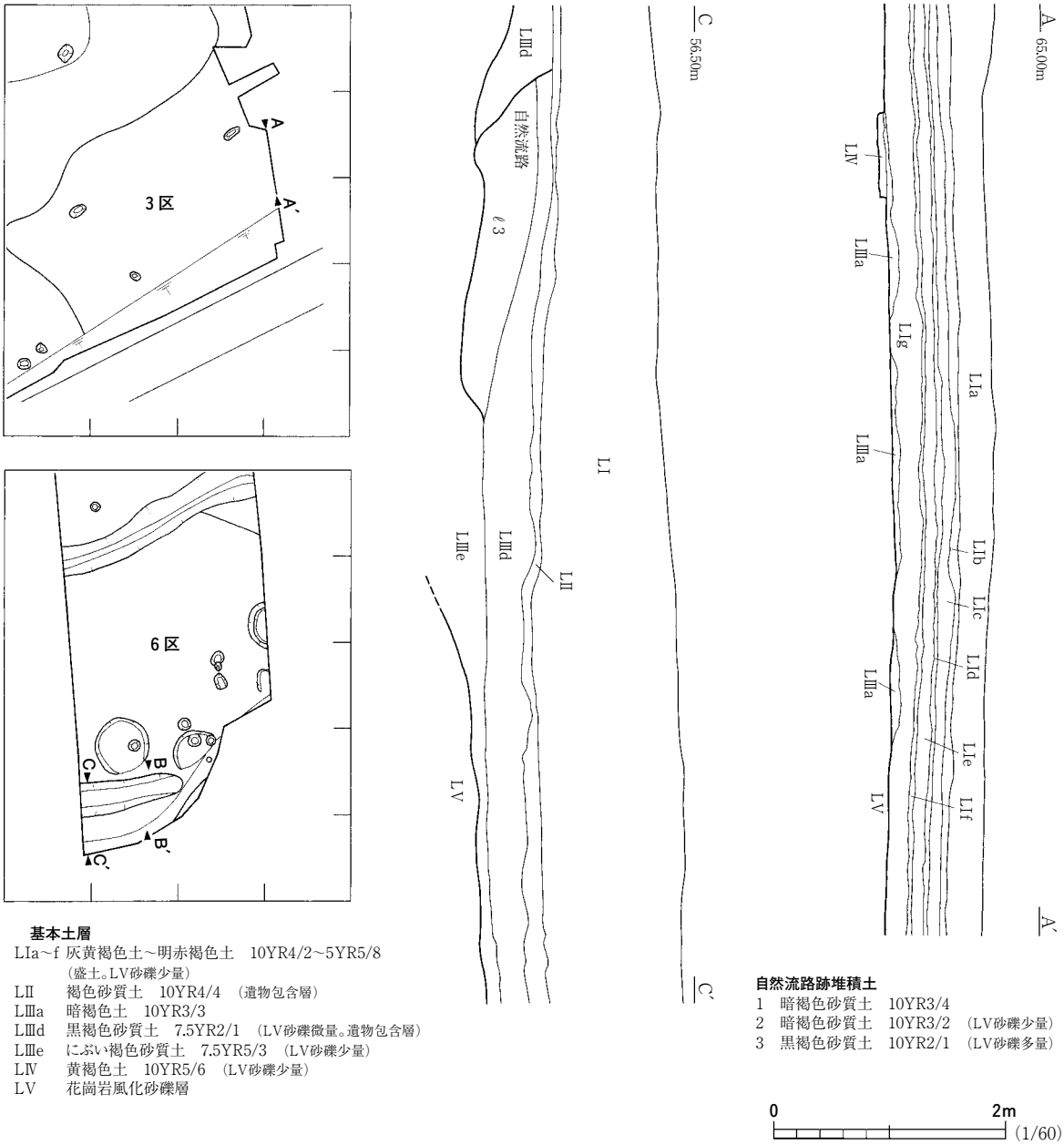


図５　基本土層

縄文時代後期にはほとんど埋まっていたことが，図４・５の基本土層Ｂ－Ｂ’，Ｃ－Ｃ’に示した土の堆積状態から推定される。

基本土層（図４・５，写真２）

平成16年度に道平遺跡２次調査を実施した，上位面の堆積状況については，圃場整備に伴って削平され，ほとんどの部分で盛土を含めた表土（ＬⅠ）の下には，基盤層である黄色土（ＬⅣ）または砂礫層（ＬＶ）が堆積していた。中位面の６区南側での堆積状況については，対岸の上平Ｂ遺跡におけるＬⅢ以下の堆積状況と酷似したことから，堆積土の一部について，上平Ｂ遺跡でのＬⅢ～ＬＶの３区分に準じて調査を進めた。

以下にその概要について述べるが，１次調査で示された基本土層とは一致していない。基本土層

については，平成16年度の２次調査の成果に，平成17年度の３次調査の成果（第４編）を合わせて，改めて検討を加えて，２・３次調査における基本土層の理解を同じくするようにした。そのため，第３・４編中の基本土層の理解については，一致している。

以下では，基本土層の観察を実施した図４・５の土層断面Ａ－Ａ’からＣ－Ｃ’部分，第４編図４Ａ－Ａ’からＨ－Ｈ’部分の成果を中心に記載する。なお，図４・５と第４編図４の土層断面中の太線は，ＬⅣまたはＬⅤの上面を示している。

ＬⅠは，ａ～ｈに８分類している。上・中位面におけるＬⅠは，すべて圃場整備に伴って削平された際の盛土で，遺物はわずかにしか含んでいない。このうちＬⅠｈは，平成17年度の３次調査区（第４編図３下の下位面14区）でのみ確認できる，河川氾濫時の再堆積した砂礫層と考え，遺物は全く含まれていない。上位面にある１・２・４区そして中位面６区の北半分では，ＬⅠ直下は基盤層の黄褐色土（ＬⅣ）である。

ＬⅡは，褐色砂質土で，層厚は12～20㎝ほどで堆積している。堆積範囲は，中位面の６区南端部から北側12ｍほどの範囲内にのみ堆積している。遺物の出土量は多く，ＬⅠ出土分を除くと包含層出土量の約70％を占めている。

ＬⅢは，ａ～ｅに７分類している。ＬⅢａ～Ⅲｃの直上は盛土（ＬⅠ）が堆積している。ＬⅢａは暗褐色土で，層厚10～15㎝，堆積範囲は上位面の２・８区で確認できる。８区（平成17年度の３次調査区）のＬⅢａ層中からは，縄文時代後期の土器片が１点（第4編図11-8）出土したように，わずかに遺物を含んでいる。ＬⅢｂは，黒褐色砂質土で，層厚は10～60㎝，堆積範囲は上位面の南端にある11・12区（平成17年度の３次調査区）において確認できる。平成17年度に発掘調査した上位面12区南東隅では，最大60㎝の厚さでＬⅢｂが堆積しており，土中には遺物を包含しており，縄文時代晩期の土器片が少量出土している。ＬⅢｃは褐色砂質土でＬⅢｂの下に堆積し，層厚は10㎝，堆積範囲は平成17年度に調査した12区南側において確認できる。ＬⅢｃは遺物を包含していないと考えている。ＬⅢｄは黒褐色砂質土で，層厚30～50㎝，堆積範囲は中位面の６区南端部から北側12ｍほどの範囲内にのみ堆積している。ＬⅢｄ中には遺物を包含しており，ＬⅠ出土分を除くと包含層出土量の約30％を占めている。ＬⅢｅはＬⅢｄの下に堆積する褐色砂質土で，層厚は50㎝以上，堆積範囲は中位面６区南端で認められる。ＬⅢｅは遺物を包含していないと考えている。

ＬⅣは，上位面においては粘土質の黄褐色土で，中位面においては砂礫を含んだ黄褐色砂質土である。ＬⅤはＬⅣの下に堆積する黄褐色～白色の砂礫層，ＬⅥはＬⅤの下に堆積する岩盤で中位面から下位面を区分する段丘崖にのみ認められ，いずれも段丘の基盤をなす堆積物で，層厚はＬⅤで約240㎝，ＬⅥは50㎝以上，いずれの層も無遺物層である。

遺構との関係は，中位面においてはＬⅢｄ上面またはＬⅤ上面で，上位面ではＬⅣ上面そして南端部ではＬⅢｃ上面でその有無を知ることができる。（阿　部）

第2節　竪 穴 住 居 跡

道平遺跡２次調査では５軒の竪穴住居跡の調査を実施した。これらの住居跡は，すべて中位面６区の段丘南側の斜面肩部に位置している。

１号住居跡　ＳＩ１

遺　　構（図６，写真３）

本遺構は，中位面６区南端のＡＳ171グリッドに位置する。ＳＩ４と重複し，本遺構の方が新しい。遺構の東半分は，調査区の外へと伸びている。検出面はＬＶの黄褐色砂礫層である。確認できた規模と平面形は，直径4.5mの半円形で，検出面からの深さは32㎝である。

堆積土は４層に分けた。ℓ１～３は，黒または暗褐色である。いずれも，レンズ状の堆積が観察されることから，自然堆積と考えている。

床面は平らで，床面からは16個の小穴（Ｐ１～16）を確認した。Ｐ１・２の２基を除く14個の小穴は西壁際に配置されている。小穴の平面形はすべて楕円形である。床面からの深さは，30～49㎝と深いもの（Ｐ１・２・６・７・９・13～15）と，30㎝未満のものがある。小穴内の堆積土はいずれも暗褐色であった。小穴の掘られた位置からＰ１・２が主柱穴，他は壁柱穴と考えている。

遺　　物（図６）

遺構内堆積土ℓ１・２内からは，縄文土器片ばかり26点出土し，そのうちの４点を図６下に示した。１は隆線で区画した無文部と，縄文を充填した文様が施される。２は深鉢の口縁部片で，刻みを入れた隆帯の下に，連続する円形の刺突文と，縄文を充填した文様が施される。３は波状の口縁部片で，外・内面の端部に盲孔を穿っている。４は斜行縄文が施されている。

ま　と　め

本遺構は円形の竪穴住居跡である。床面には２基の主柱穴と，14基の壁柱穴が作られていた。時期は，出土遺物から大木10式期と併行することから，縄文時代中期末葉と考えている。　（阿　部）

２号住居跡　ＳＩ２

遺　　構（図７，写真４）

本遺構は，中位面６区南端のＡＳ173グリッドに位置する。検出面はＬＶ上面である。遺構の東半分は調査区の外へと続き，南半分は削平されている。

推定される平面形は楕円形であったと考えている。確認できた規模は，南北長で約1.5m，東西長約0.6m，検出面からの深さは最大で約10㎝である。堆積土は２層に分けられた。壁際からの流れこみの状況を観察できることから，自然堆積土と考えている。

床面は平らで，床面の内外から２個の小穴（Ｐ１・２）を確認した。小穴の平面形はいずれも不

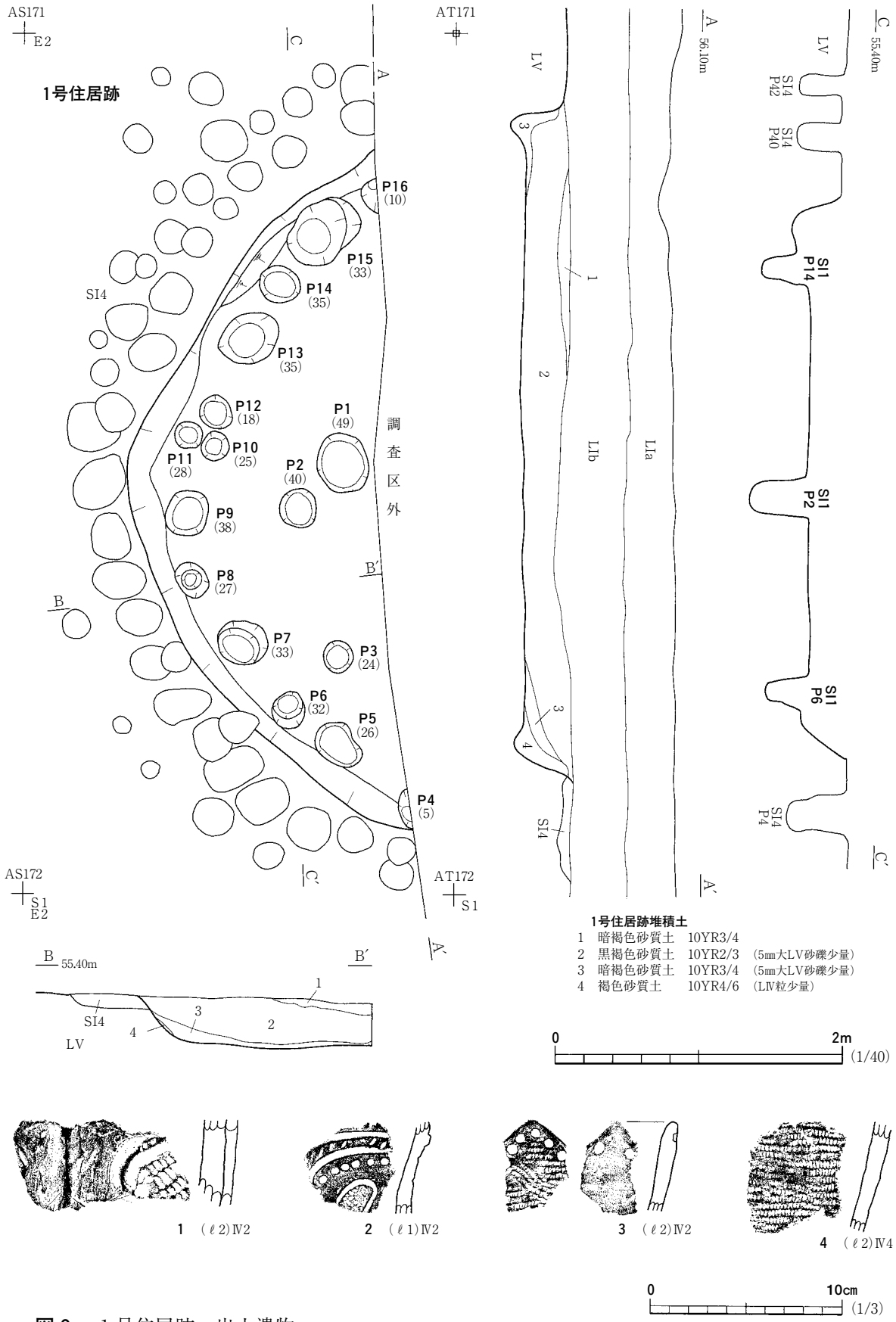


図６　１号住居跡，出土遺物

整楕円形で，深さはＰ２で10㎝，Ｐ１は40㎝である。小穴内の堆積土はいずれも暗褐色土で，柱痕は確認できなかった。Ｐ１の底には，柱材の支えとなった可能性の高い10㎝ほどの扁平な河原石が１個置かれていた。２個の小穴については，作られた位置から，Ｐ１は壁柱穴，Ｐ１は主柱穴と考えている。遺構内からの出土遺物はない。

ま　と　め

本遺構は楕円形の竪穴住居跡の可能性が高いと考えている。床面には１個の主柱穴，壁際に１個の壁柱穴を確認した。時期は，周囲の遺構の配置，遺物包含層からの出土遺物から判断して，縄文時代後期と考えている。（阿　部）

３号住居跡　ＳＩ３

遺　　構（図８，写真４・５）

本住居跡は中位面６区南端，下位面へと続く段丘崖の上端，ＡＰ174グリッドに位置している。ここは段丘崖に接する部分で，かろうじて圃場整備時の削平を免れ，狭い範囲ではあるが遺物包含層も残っている。ＳＫ25と重複するが，ＳＫ25の内部はほぼ段丘礫で埋まり，住居の堆積土中にも相当量の礫が含まれることから，新旧の判断はできなかった。

検出面は斜面の上位にあたる北半部が，ＬⅣとした段丘の基盤である黄褐色の砂礫層上面である。一方，斜面下位に相当する南半にはＬⅢｄとした黒褐色土が堆積し，平面観察でも・土層の断面観察でも，明確な掘りこみ面を把握することはできなかった。ＬⅢｄについては，上部までしか縄文時代後期以降の遺物が含まれないことから，ＬⅢｄ中に掘りこみ面があったものと考えている。住居の南半については，最終的にＬⅢｄをすべて除去し，小穴等の有無を確認した。遺存状態は比較的良好で，住居のほぼ全様を確認することができた。

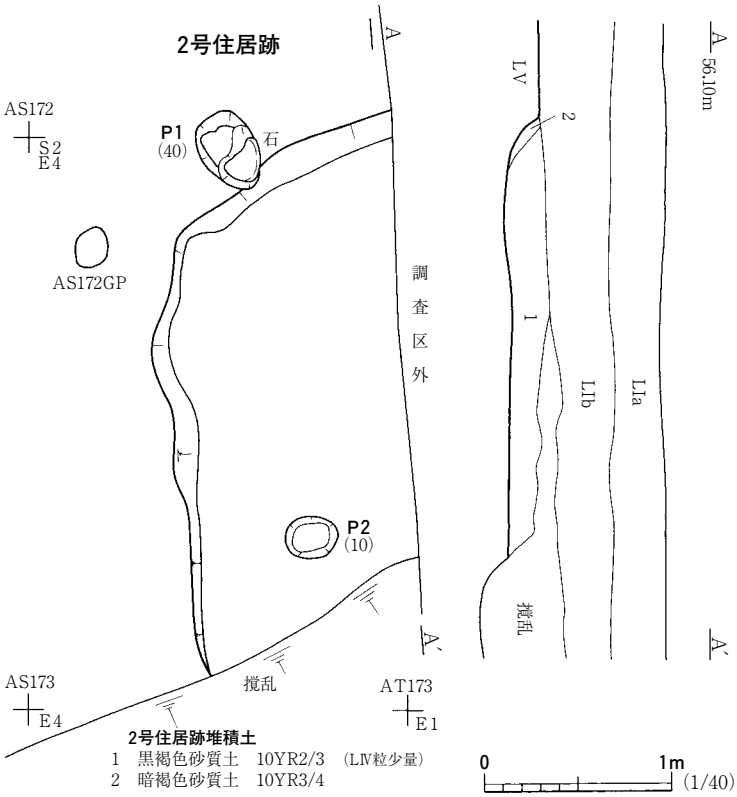


図７　２号住居跡

平面形は楕円形状をなし，長軸は等高線とほぼ平行し，北東から南西方向を示す。規模は長軸５ｍ，短軸4.2ｍほどと考えられる。検出面からの深さは，最も遺存状態の良好な北西部で10㎝である。床面は南へと緩やかに傾斜する。また，ＬⅣに作られているため，基

盤層に含まれる段丘礫が顔を出し，凹凸が著しい。住居内にはＬⅢに近似する黒褐色土が堆積していた。堆積土中に人為堆積を示すような混入物が認められないことから，自然堆積と考えている。

住居跡内からは炉と小穴，周溝を確認した。炉は住居のほぼ中央に作られ，炉の長辺の方向は住居の長軸とほぼ直交している。基本的には長方形の石囲炉と考えているが，現状では短辺側に炉石が残っているだけである。南西側には２列の石列が確認されることから，炉の作り変えが行われたものと考えている。規模は内側の石列で，長辺85㎝×短辺45㎝，外側の石列では，同じく100×65㎝ほどである。図８のＣ－Ｃ’に示す土層断面から，ℓ２で埋められている内側の石列が新しく，北西側の石はℓ３で埋められていることから，古い時期から作り変えられることなく使われたものと考えている。ℓ１が炉内の堆積土，ℓ２・３の上面が炉の使用面と考えているが，この部分が焼土化しているような状態は，確認できなかった。

小穴は総数92個の小穴を検出し，その深さを図８下段に示した。Ｐ１～Ｐ４は炉を取り囲むように配置され，床面からの深さも42～52㎝と他のものに比べて深いことから，この４個の穴を本住居跡の柱穴と考えている。Ｐ１とＰ２は溝状をなすもので，複数の小穴が連続して作られたような状態が見て取れる。その形状から，出入り口の施設を兼ねたものと考えている。炉と重複して大型の穴が作られているが，これについては重複から，本住居跡に直接伴はないものと考えておきたい。

他の小穴については，住居跡の壁際を巡るものが多く，その作られた位置と規模から壁柱穴と考えられる。規模は直径20～35㎝，深さ15～30㎝ほどのものが多い。壁柱穴には，壁際を巡るものと壁から40㎝ほど内側を巡っているものがあることから，本住居跡については炉だけではなく，壁柱穴も作り変えられている可能性が高い。小穴内堆積土もＬⅢｄに近似する黒褐色土で，含まれる黄色土ブロックの量で２分できるが，その配置等に規則性は認められなかった。周溝は住居跡の北半を，一部途切れながら巡っている。南半については，ＬⅢｄとの区別が難しく確認できなかった可能性もある。現況で確認した規模は，幅約30㎝，床面からの深さは10㎝ほどである。壁柱穴は壁溝の中に作られているものも多い。

遺　　物（図８，写真10）

本住居跡内については遺構の検出が難しく，少しずつ包含層を掘りこみながら調査を進めていった。このため，遺物の多くは遺物包含層で取り上げられ，本住居跡出土として取り上げたものは，縄文土器14点と石器１点で，そのうちの４点を図８に示した。１は端部を欠損しているが，端部に沿って沈線を巡らせた深鉢口縁部片である。２・３は，外面に斜行縄文を施した深鉢胴部片である。４の粗製土器は，本住居跡の床面と包含層として取り上げたものが，接合したものである。この深鉢形土器は，口縁部片と底部片との接合ができなかったことから図上にて復元したため，器高は推定値となっている。

ま　と　め

本住居跡については，方形の石囲炉を有する楕円形の竪穴住居跡で，４本の主柱と壁際を巡る壁柱で上屋が作られていたことが考えられる。Ｐ１・Ｐ２は溝状の柱穴で，一部は壁から張り出して

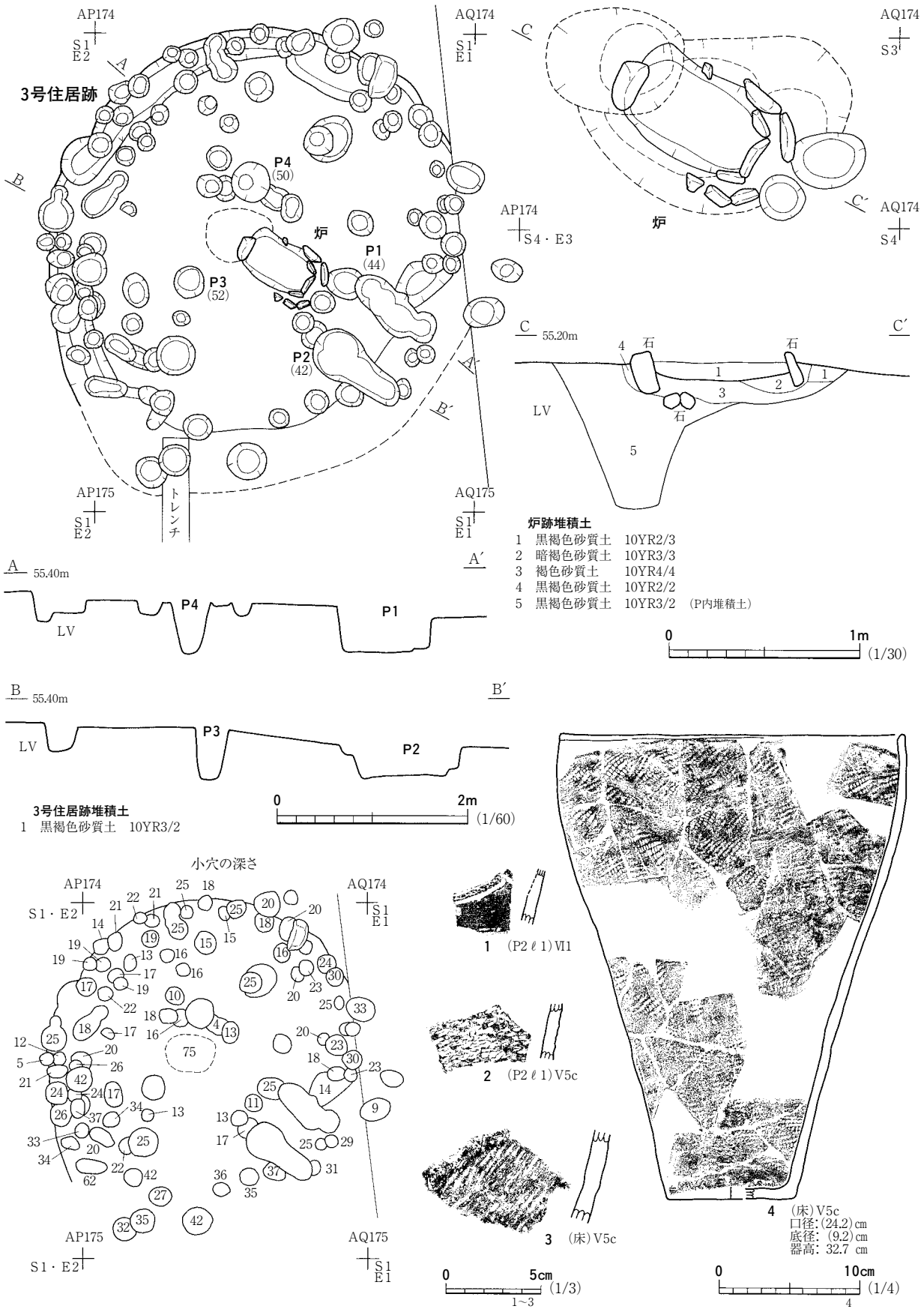


図８　３号住居跡，出土遺物

いる。そのあり方から，出入り口施設の柱穴も兼ねていたことが考えられる。石囲炉と壁柱穴には，作り変えが認められた。本住居跡の時期については，出土遺物が少なく明言できないが，Ｐ２から出土した図８－１が堀之内２式土器と考えられることから，これに併行する縄文時代後期前葉と考えたい。

（松　本）

４号住居跡　ＳＩ４

遺　　構（図９，写真３）

本住居跡は，中位面６区南端のＡＳ171・172グリッドにまたがって位置する。ＳＩ１と重複し，本住居跡の方が古い。住居跡の大半はＳＩ１に壊され，東半分は調査区の外へと伸びている。検出面は，ＬＶ上面である。

床面のほとんどは，ＳＩ１によって壊されているため，壁際から40㎝内側のみ残存する。平面形は，本来円形であったと考えている。規模は，直径で最大約2.9ｍ，検出面からの床面までの深さは最大６㎝である。堆積土は褐色土の１層のみある。

住居内には，計45個の小穴が作られている。小穴はすべて壁際に配置され，平面形は不整楕円形または円形である。規模は，長軸が10㎝以下のもの（Ｐ11・13・23・25・28・32・34・39・41・43），長軸が20㎝以上のもの（Ｐ６・８・12），残りは11～19㎝内のものの３種類がある。検出面からの深さは，20㎝以下のもの（Ｐ11・13・17・16・25・34・36・38・43），50㎝以上のもの（Ｐ19・21・22・37・45），残りは21～49㎝内のものの３種類がある。

Ｐ９・10，Ｐ14・15，Ｐ21・22，Ｐ30・31そしてＰ44・45の小穴ではそれぞれ重複を確認でき，内側にある小穴（Ｐ９・14・21・30・44）の方が新しい。小穴は，作られた位置から，すべて壁柱穴と考えている。

遺構内からは，遺物を確認していない。

ま　と　め

本遺構は，本来円形の竪穴住居跡である。壁際には壁柱穴を作り，小穴の重複から，少なくとも１度は規模を小さくして造り変えている。時期については重複関係から，ＳＩ１よりも古い，縄文時代中期末葉と考えている。

（阿　部）

５号住居跡　ＳＩ５

遺　　構（図10，写真５・６）

本住居跡は，中位面６区南端のＡＱ・ＡＲ174グリッドにまたがって位置する。ＳＭ１は本遺構と重複し，本住居跡と同時期の所産と考えている。また，ＳＫ22とも重複し，本住居跡の方が新しい。検出面は，ＬⅢｄ上面である。南東側半分は，削平され確認できなかった。

遺存部の形状から平面形は，不整楕円形状だったと考えている。確認できた規模は，長軸約2.9ｍ，短軸約1.5ｍ，検出面からの深さは７㎝である。住居内堆積土は黒色土の１層だけであった。

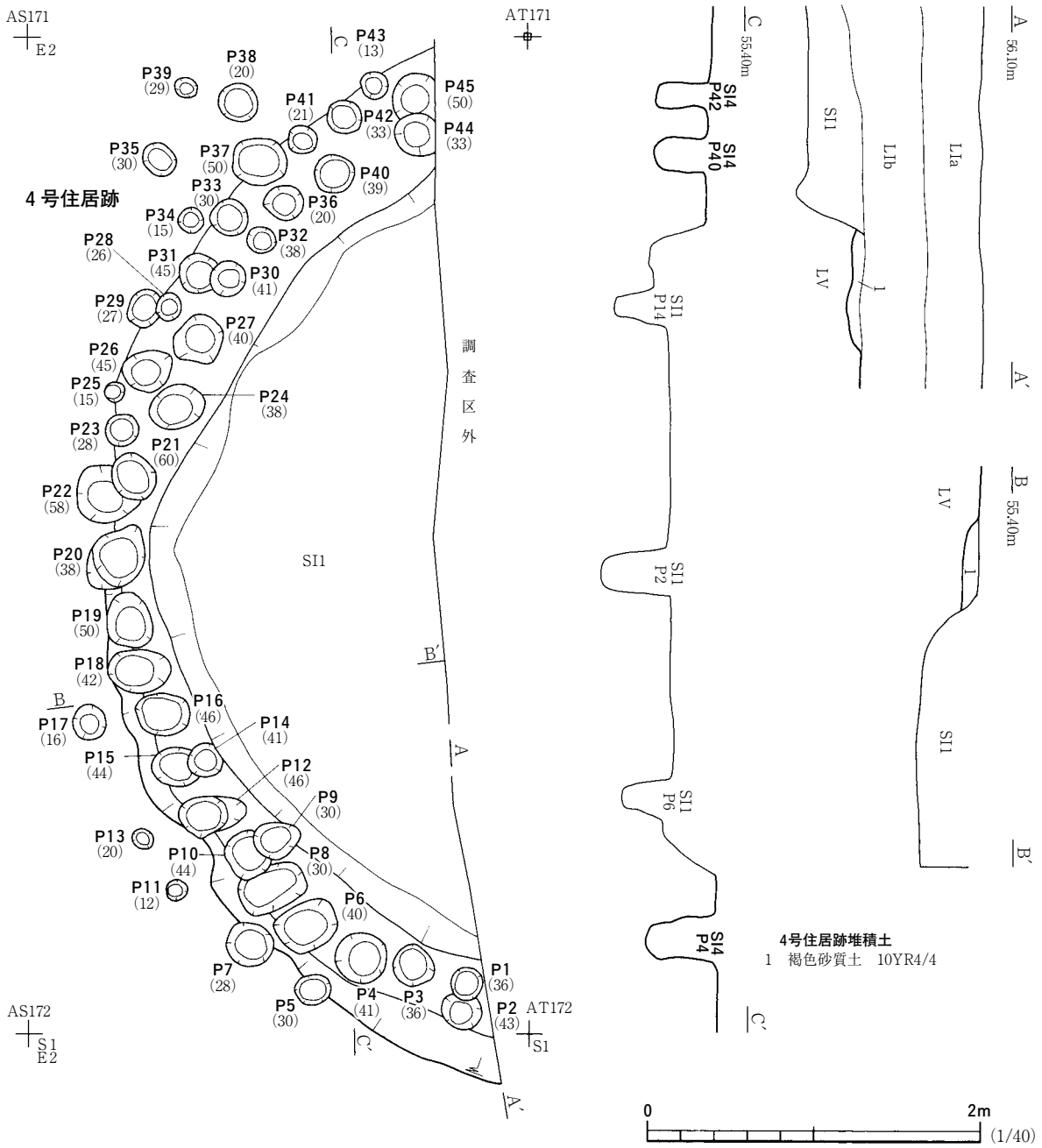


図９　４号住居跡

床面は概ね平らで，住居跡内からは６個（Ｐ１～６）の小穴と炉そして土器埋設遺構を１基確認した。小穴の平面形は，円形または不整楕円形である。規模は長軸40～50㎝で，深さは検出面から20㎝と浅いものと，30㎝以上の深いもの（Ｐ１～４・６）がある。小穴内の堆積土は黒褐色土で，柱痕は確認できなかった。配置には規則性も無いことから，小穴の性格は特定できない。

炉は，床面と想定される範囲の北西寄りに位置する。直径約90㎝の掘形内の中央は，掘形の底でも深めに掘りこみ，中に２個体の深鉢形土器を入れ子にして設置していた。炉詳細図（図10下段Ｂ－Ｂ’）中に示してある外側の深鉢は，劣化していたため取り上げ後の洗浄で細片化し，接合そして図化できなかった。内側の埋設土器（図11－１）は，口縁部と底部を欠いていた。土器の周囲

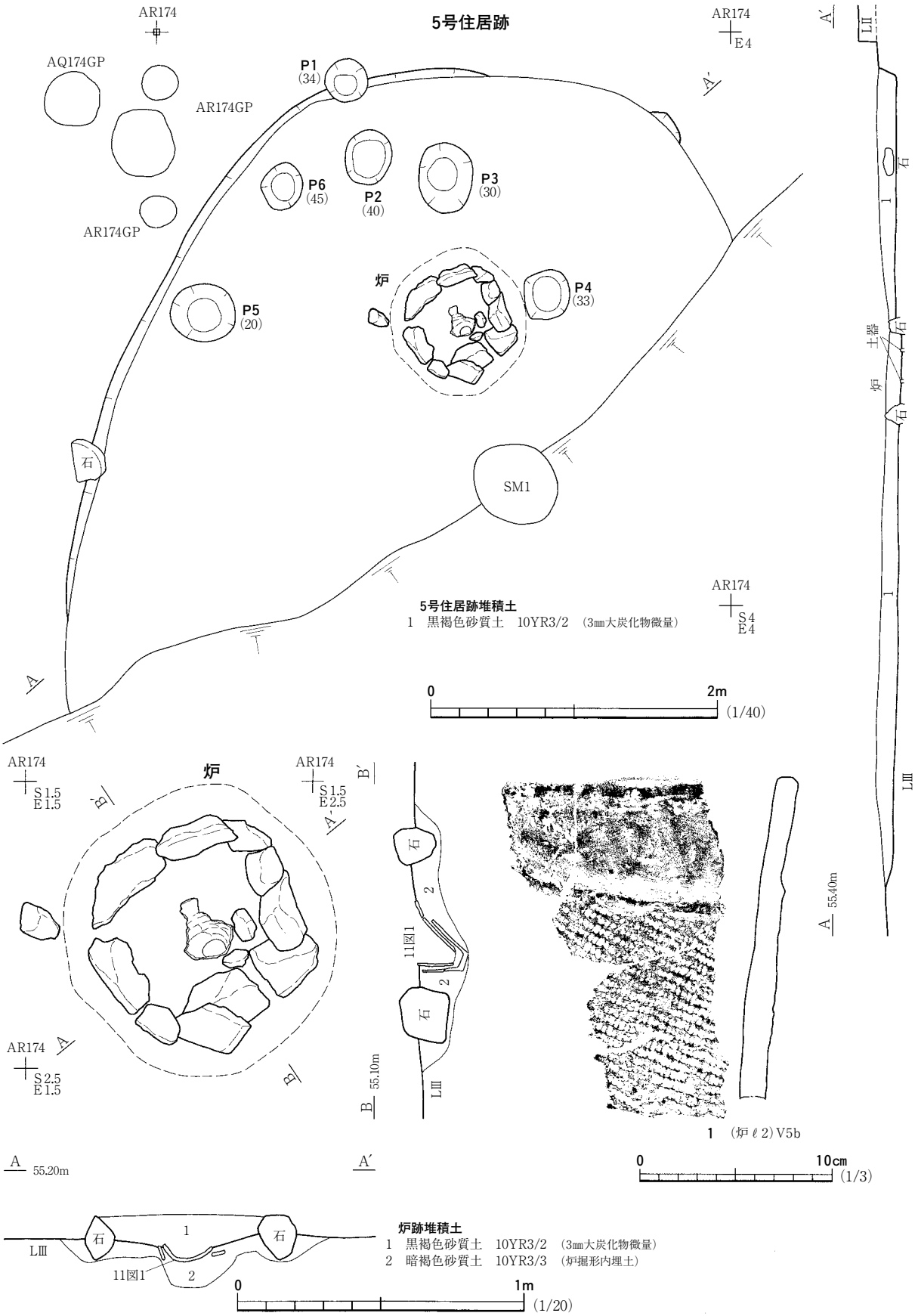


図10　５号住居跡，出土遺物

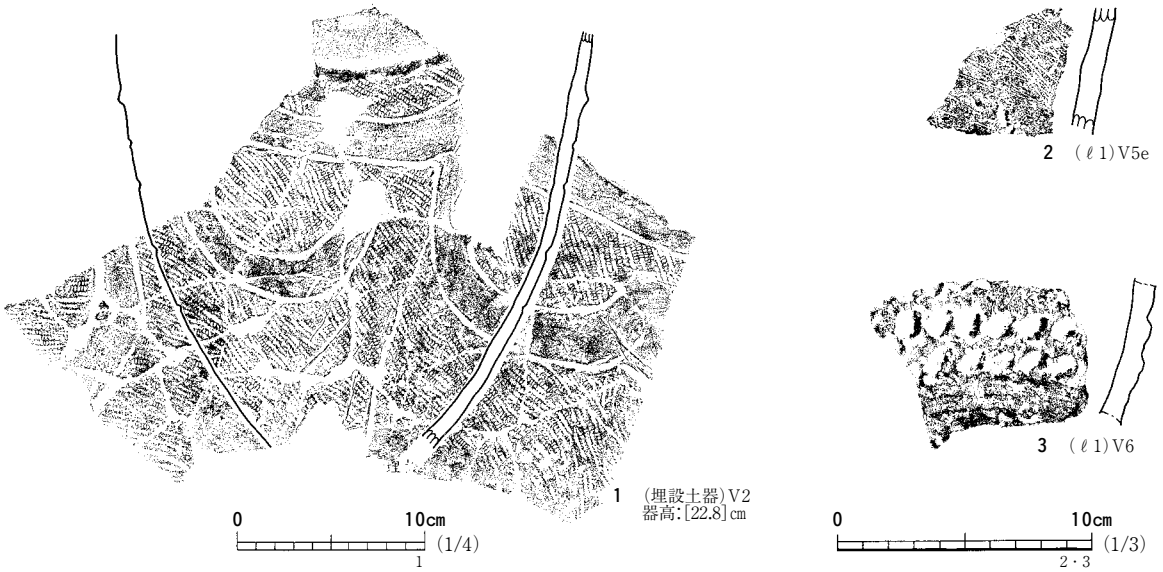


図11　５号住居跡出土遺物

には，長さ20㎝大の角礫を方形状に囲んでいる。石囲の規模は，石の内縁で一辺約70㎝である。

遺　　物（図10・11，写真10）

遺構内堆積土ℓ１内からは，縄文土器片43点出土し，そのうち４点を図10・11に示した。図10－１，図11－１は石囲炉の内側に埋設された深鉢形土器である。炉詳細図（図10下段Ｂ－Ｂ’）中に示した下位に埋設された深鉢形土器については，精査時には深鉢の底部から胴部下半部の部分が残存していたが，被熱劣化が著しく，洗浄後細片化し復元できず，図化していない。

図11－１は，石囲炉の内側に入れ子の状態で確認された土器の内，上位にあった土器で，口縁部と底部を欠損している。胴部は，曲線を描いた隆帯の下には「し」字状の文様を横位に連結している。

図10－１は，２個の埋設土器の間に差し込まれていた深鉢の口縁部片で，口縁部付近に隆線を巡らしている。図11－２・３はℓ1から出土した深鉢の胴部片である。３の外面には横位の連続刺突文を施している。２は外面に条線文を施している。

ま　と　め

本遺構は，方形の石囲炉を有する不整な楕円形の竪穴住居跡である。時期については，図11－１が称名寺式系土器と考えられることから，縄文時代後期初頭と考えている。　（阿　部）

第３節　土　　坑

２次調査では，26基の土坑を確認した。そのうちの３基は落し穴状土坑であった。ＳＫ12～15・17・18の計６基の貯蔵穴は，上位面の３区の南西隅にて東西方向に並んでいた。土坑の番号は，平成14年度調査に続けて５番から付けた。

５号土坑　ＳＫ５（図12，写真６）

本土坑は，上位面３区のＡＬ135・136グリッドにまたがって位置する。検出面はＬⅣ上面である。平面形は不整型楕円形で，規模は上端で長軸1.9ｍ，短軸90㎝，検出面からの深さは最大62㎝である。遺構内の堆積土は，６層に分けられる。いずれの層も，周壁の崩落に起因したＬⅣ粒または塊を含んでいることから，自然堆積土と考えている。遺構内からの遺物は出土していない。

本土坑は，規模・形態から，落し穴状土坑と考えられる。時期は，出土遺物が無く判断し得ないが，縄文時代と考えている。

６号土坑　ＳＫ６（図12，写真７）

本土坑は，上位面３区のＡＫ138グリッドに位置する。検出面はＬⅣ面である。

平面形は不整楕円形である。底面の中央部は，ＬⅣを削り残し，底の周縁よりも５㎝前後高くなっている。規模は，上端で長軸約1.7ｍ，短軸1.5ｍ，検出面からの深さは底面縁で70㎝である。遺構内堆積土は４層に分けられる。いずれの層も，ＬⅣを基調としている。ℓ２はＬⅣを主体とした土で，ℓ３を取り巻くように堆積していることから，人為的に埋められた可能性が高いと考えている。土坑内から遺物は出土していない。

本土坑についての時期と機能については，出土遺物が無いことから，不明である。

７号土坑　ＳＫ７（図12，写真７）

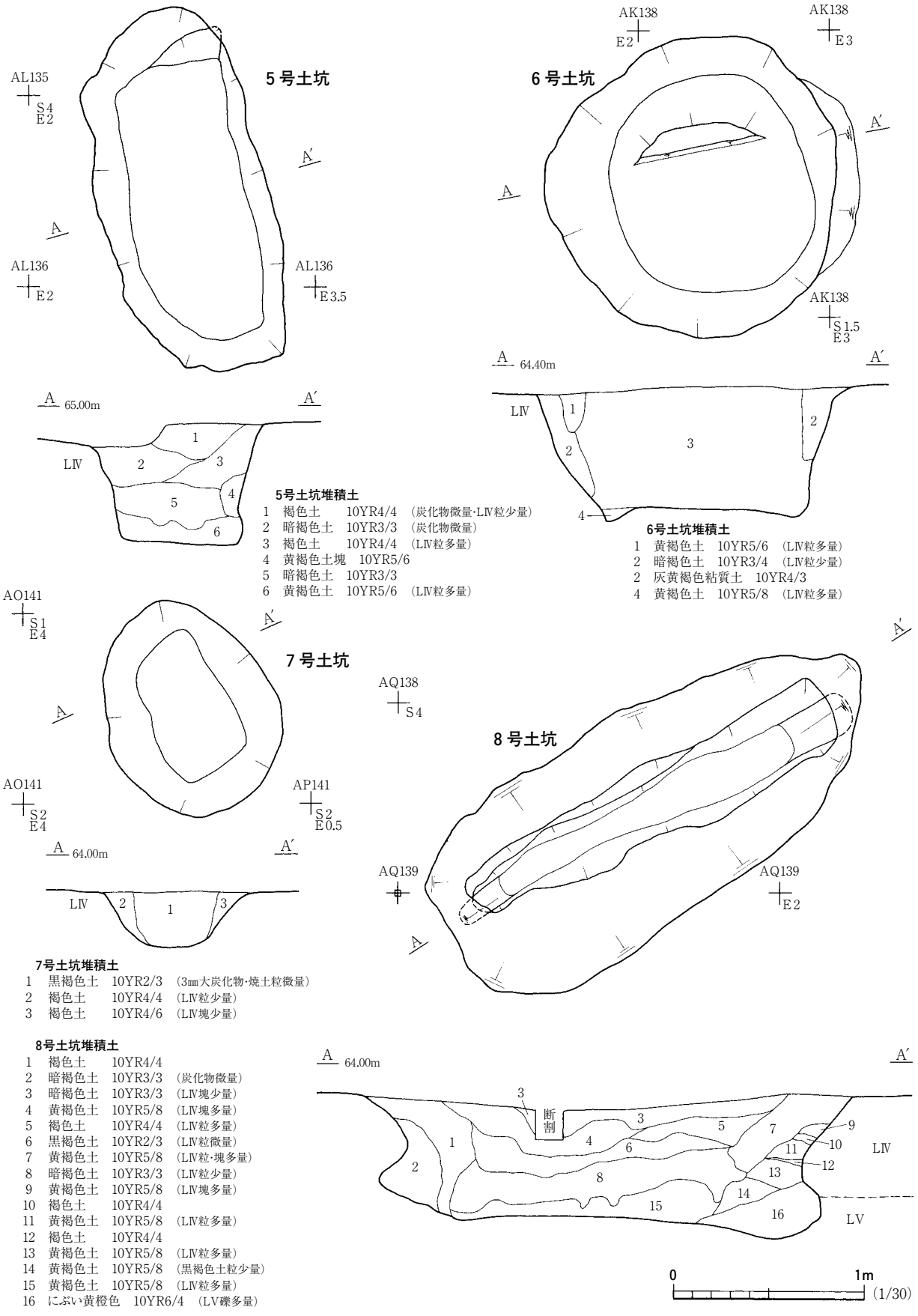
本土坑は，上位面３区のＡＯ141グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は楕円形である。規模は長軸約1.1ｍ，短軸約90㎝，検出面からの深さは30㎝である。遺構内堆積土は３層に分けられ，ℓ１には微細な炭化物が含まれている。ℓ２はＬⅣを主体とした土で，ℓ１を取り巻くように堆積していることから，人為的に埋められた可能性が高い。土坑内から遺物は出土していない。

本土坑の時期と機能については，出土遺物が無いことや，形態等に特徴が無いことから，不明である。

８号土坑　ＳＫ８（図12，写真６）

本土坑は，上位面３区のＡＱ138・139グリッドにまたがって位置する。検出面はＬⅣ上面である。底面はＬⅤの花崗岩の風化した砂礫層（ＬⅤ）に達する。平面形は上端で不整楕円形，中端では隅丸長方形である。規模は上端で長軸2.6ｍ，短軸1.1ｍ，中端では長軸2.1ｍ，短軸最大40㎝，検出面からの深さは最大65㎝である。底面の平面形は，細長い隅丸楕円形である。底面の規模は，長軸1.7ｍ・短軸最大30㎝である。底面の両端は，中端より外側へ10㎝前後抉れている。周壁は，オーバーハングして立ち上がる。遺構内堆積土は16層に分けられる。ℓ４・５・７・９・10～16には，周壁



5号土坑堆積土

1　褐色土　10YR4/4　（炭化物微量･LⅣ粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3　（炭化物微量）
3　褐色土　10YR4/4　（LⅣ粒多量）
4　黄褐色土塊　10YR5/6
5　暗褐色土　10YR3/3
6　黄褐色土　10YR5/6　（LⅣ粒多量）

6号土坑堆積土

1　黄褐色土　10YR5/6　（LⅣ粒多量）
2　暗褐色土　10YR3/4　（LⅣ粒少量）
2　灰黄褐色粘質土　10YR4/3
4　黄褐色土　10YR5/8　（LⅣ粒多量）

7号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR2/3　（3㎜大炭化物･焼土粒微量）
2　褐色土　10YR4/4　（LⅣ粒少量）
3　褐色土　10YR4/6　（LⅣ塊少量）

8号土坑堆積土

1　褐色土　10YR4/4
2　暗褐色土　10YR3/3　（炭化物微量）
3　暗褐色土　10YR3/3　（LⅣ塊少量）
4　黄褐色土　10YR5/8　（LⅣ塊多量）
5　褐色土　10YR4/4　（LⅣ粒多量）
6　黒褐色土　10YR2/3　（LⅣ粒微量）
7　黄褐色土　10YR5/8　（LⅣ粒･塊多量）
8　暗褐色土　10YR3/3　（LⅣ粒少量）
9　黄褐色土　10YR5/8　（LⅣ塊多量）
10　褐色土　10YR4/4
11　黄褐色土　10YR5/8　（LⅣ粒多量）
12　褐色土　10YR4/4
13　黄褐色土　10YR5/8　（LⅣ粒多量）
14　黄褐色土　10YR5/8　（黒褐色土粒少量）
15　黄褐色土　10YR5/8　（LⅣ粒多量）
16　にぶい黄橙色　10YR6/4　（LV礫多量）

図12　５～８号土坑

の崩落に起因したＬⅣの塊またはＬⅤの砂礫が含まれていることから，自然堆積土と考えている。

土坑内からは，遺物は出土していない。

本土坑は，規模・形態から，落し穴状土坑と考えられる。時期は，遺物の出土が無く判断し得ないが，縄文時代と考えている。

９号土坑　ＳＫ９（図13，写真７）

本土坑は上位面３区のＡM140グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は長軸約1.5m，短軸約1.1m，検出面からの深さは40㎝である。遺構内堆積土は３層に分けられ，レンズ状の堆積状況が観察されることから，自然堆積と判断した。土坑内からは，遺物は出土していない。

本土坑の時期と性格については，出土遺物が無く，形態等に特徴がないことから不明である。

10号土坑　ＳＫ10（図13，写真７）

本土坑は上位面３区のＡM137グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は長軸約２m，短軸約1.8m，検出面からの深さは60㎝である。遺構内堆積土は４層に分けられる。堆積土中には周壁の崩落に起因したＬⅣ粒または塊が含まれていることとから，自然堆積と判断した。土坑内からは，遺物は出土していない。

本土坑の時期と性格については，出土遺物が無く，形態等も特徴が無いことから不明である。

11号土坑　ＳＫ11（図13，写真６）

本土坑は上位面３区のＡM135グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は細長い楕円形で，南西隅は撹乱により壊されている。規模は上端で長軸２m，短軸50㎝，検出面から底面までの深さは，最大75㎝である。底面は砂礫層に達している。遺構内堆積土は，４層に分けた。いずれの層も，周壁の崩落に起因したＬⅣの塊またはＬⅤの砂礫を含んでいることから，自然堆積土と考えている。土坑内から遺物は出土していない。

本土坑については，形態及び規模から，落し穴状土坑と考えている。時期については，遺物の出土が無く，時期を特定することは難しいが，縄文時代と考えている。

12号土坑　ＳＫ12（図13，写真７）

本土坑は，上位面３区のＡＨ145グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は長軸約1.4m，短軸1.3m，検出面からの深さは30㎝である。遺構内堆積土は４層に分けられる。いずれの層も，周壁の崩落によるＬⅣの塊を含むことから，自然堆積土と考えている。遺物は，底面南西隅からは，拳大の花崗岩の角礫が１個出土している。

本土坑については，出土遺物が少なく時期の特定はできないが，形態と規模から縄文時代の貯蔵

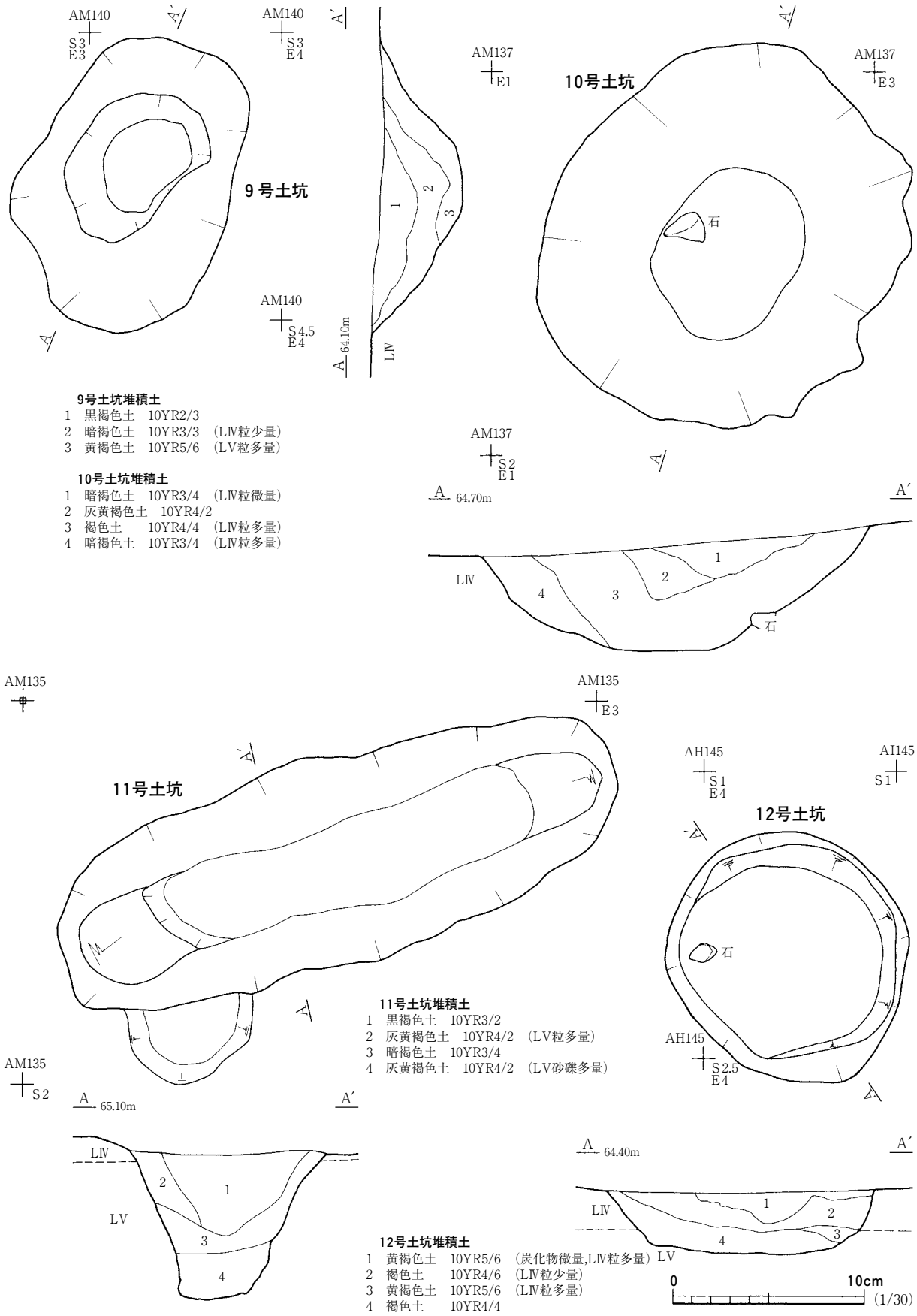

9号土坑
10号土坑
11号土坑
12号土坑
AM140
AM137
AM135
AH145
AI145
A
A′
64.10m
64.70m
65.10m
64.40m
LⅣ
LV
石
0
10cm
(1/30)
9号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3
2　暗褐色土　10YR3/3　(LⅣ粒少量)
3　黄褐色土　10YR5/6　(LV粒多量)
10号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4　(LⅣ粒微量)
2　灰黄褐色土　10YR4/2
3　褐色土　10YR4/4　(LⅣ粒多量)
4　暗褐色土　10YR3/4　(LⅣ粒多量)
11号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2
2　灰黄褐色土　10YR4/2　(LV粒多量)
3　暗褐色土　10YR3/4
4　灰黄褐色土　10YR4/2　(LV砂礫多量)
12号土坑堆積土
1　黄褐色土　10YR5/6　(炭化物微量,LⅣ粒多量)
2　褐色土　10YR4/6　(LⅣ粒少量)
3　黄褐色土　10YR5/6　(LⅣ粒多量)
4　褐色土　10YR4/4

図13　９～12号土坑

穴と考えられる。

13号土坑　ＳＫ13（図14，写真７）

本土坑は，上位面３区のＡＩ145グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は長軸約２ｍ，短軸1.8ｍ，検出面からの深さは最大55㎝である。北東及び南西隅では，底面縁が上端の外側へと抉りこんでいる。

遺構内堆積土は11層に分けられ，ℓ11を除いた土色は褐色または黄褐色である。ℓ４～８には周壁の崩落に起因したＬⅣ粒または塊が含まれていることから，自然に堆積した可能性が高いと考えている。

遺物は，底面縁から，20㎝大の花崗岩の角及び円礫が計10個出土している。

本土坑は形態及び規模から貯蔵穴と考えられる。時期は出土遺物が少なく特定できないが，縄文時代と考えている。

14号土坑　ＳＫ14（図14・17，写真７）

本土坑は上位面３区のＡＫ144グリッドに位置する。検出面はＬⅣ面である。

平面形は不整楕円形で，上層は試掘調査の段階で，40㎝ほど失われていた。規模は長軸約1.3ｍ，短軸1.2ｍ，検出面からの深さは最大40㎝である。

遺構内堆積土は７層に分けられ，ℓ６を除いた土色は褐色または黄褐色である。ℓ２～７には周壁の崩落に起因したＬⅣ粒または塊が含まれていることから，自然堆積と考えている。

遺物は，底面縁から20㎝大の花崗岩の角及び円礫が計３個出土し，他にℓ１から縄文土器片４片出土している。図17－１は，波状の口縁部を有する深鉢で，口縁部下端を隆帯で区画し，円形浮文の下から「Ｃ」字状の文様を描いている。

本土坑については，規模及び形態から貯蔵穴と考えている。時期は，出土遺物から縄文時代後期前葉と考えている。

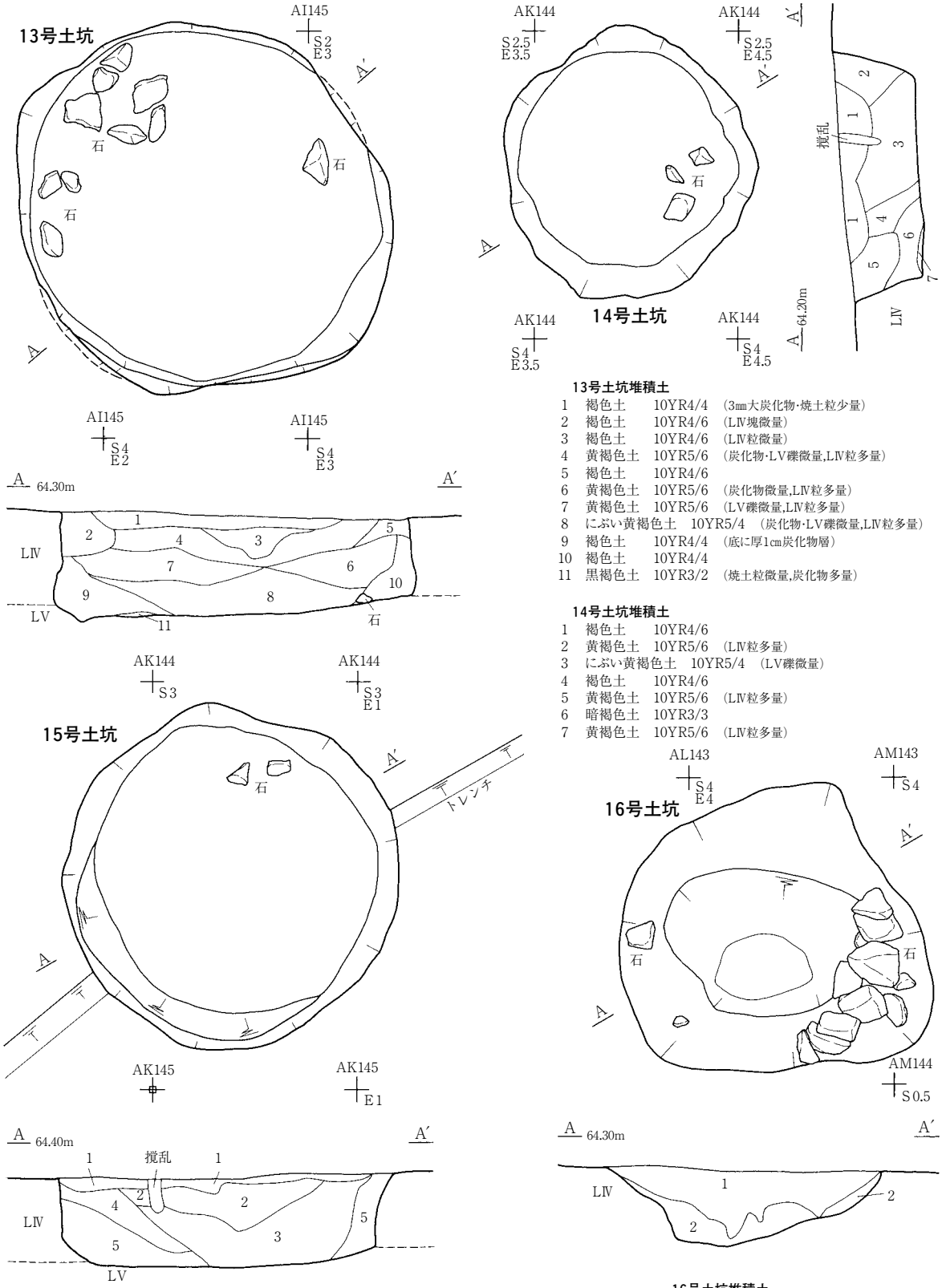
15号土坑　ＳＫ15（図14，写真７）

本土坑は，上位面３区のＡＫ144グリッドに位置する。検出面は，ＬⅣ上面である。

平面形は不整円形で，南半分はすでに試掘調査時に壊されている。規模は直径1.7ｍ，検出面からの深さは45㎝である。遺構内堆積土は５層に分けられ，土色は褐色または黄褐色である。堆積状況には，壁際からの流れこみの様相が認められることから，自然堆積と考えている。

遺物は，底面縁から拳大の花崗岩の角礫が計２個出土している。

本土坑については，出土遺物が少なく時期は特定できないが，形態及び規模から縄文時代の貯蔵穴と考えている。



13号土坑堆積土

1　褐色土　10YR4/4　(3㎜大炭化物･焼土粒少量)
2　褐色土　10YR4/6　(LⅣ塊微量)
3　褐色土　10YR4/6　(LⅣ粒微量)
4　黄褐色土　10YR5/6　(炭化物･LV礫微量,LⅣ粒多量)
5　褐色土　10YR4/6
6　黄褐色土　10YR5/6　(炭化物微量,LⅣ粒多量)
7　黄褐色土　10YR5/6　(LV礫微量,LⅣ粒多量)
8　にぶい黄褐色土　10YR5/4　(炭化物･LV礫微量,LⅣ粒多量)
9　褐色土　10YR4/4　(底に厚1㎝炭化物層)
10　褐色土　10YR4/4
11　黒褐色土　10YR3/2　(焼土粒微量,炭化物多量)

14号土坑堆積土

1　褐色土　10YR4/6
2　黄褐色土　10YR5/6　(LⅣ粒多量)
3　にぶい黄褐色土　10YR5/4　(LV礫微量)
4　褐色土　10YR4/6
5　黄褐色土　10YR5/6　(LⅣ粒多量)
6　暗褐色土　10YR3/3
7　黄褐色土　10YR5/6　(LⅣ粒多量)

15号土坑堆積土

1　褐色土　10YR4/6　(LⅣ粒微量)
2　にぶい黄褐色土　10YR5/4　(LV礫微量,LⅣ粒多量)
3　褐色土　10YR4/6　(LV礫微量)
4　黄褐色土　10YR5/6　(LV礫微量,LⅣ粒多量)
5　褐色土　10YR4/6　(LV礫微量,底に5㎜大炭化物)

16号土坑堆積土

1　灰黄褐色粘質土　10YR4/2
2　黄褐色土　10YR5/6　(LⅣ塊多量)

図14　13～16号土坑

16号土坑　ＳＫ16（図14，写真８）

本土坑は上位面３区のＡＬ143・144グリッドに位置する。検出面はＬⅣ面である。

平面形は，不整楕円形である。規模は長軸約1.6ｍ，短軸1.4ｍ，検出面からの深さは35㎝である。遺構内堆積土は２層に分けられる。堆積状況には，壁際から流れこみの様相が認められることから，自然堆積と考えている。遺物は，底面の南東縁から30㎝大の角礫を確認した。

本土坑の時期と機能については，出土遺物が少なく，形態等に特徴が無いため不明である。

17号土坑　ＳＫ17（図15，写真８）

本土坑は上位面３区のＡＬ144グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は不整円形で，南縁は撹乱により壊されている。規模は直径1.7ｍ，検出面からの深さは80㎝である。遺構内堆積土は６層に分けられる。ℓ４については，いわゆるフラスコ状土坑の堆積土に見られる中央が高い小山状の堆積状況が認められる。ℓ５・６については，周壁の崩落に起因したＬⅣ粒または塊を含んでいることから，自然堆積と考えている。

遺物は，底面から，20㎝前後の花崗岩の角・円礫が計12個出土している。

本土坑は，出土遺物が少なく特定できないが，形態及び規模から縄文時代の貯蔵穴と考えられる。

18号土坑　ＳＫ18（図15・17，写真８）

本土坑は，上位面３区のＡＪ145グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は不整円形で，南東縁は試掘調査時に壊されている。規模は直径約1.7ｍ，検出面から底面までの深さは50㎝である。遺構内堆積土は６層に分けられる。ℓ１・６を除いた土色は，褐色または黄褐色である。ℓ３～５については，周壁の崩落に起因したＬⅣ粒または塊を含んでいることから，自然堆積と考えている。

本土坑から縄文土器片が２片出土し，図17に図化した。図17－２は，深鉢口縁部付近の破片で，外面に縄文を転がした後，蕨手状の文様を描いている。同図３は頸部の無文部に２条の平行沈線を，胴部に横位の沈線文を施している。

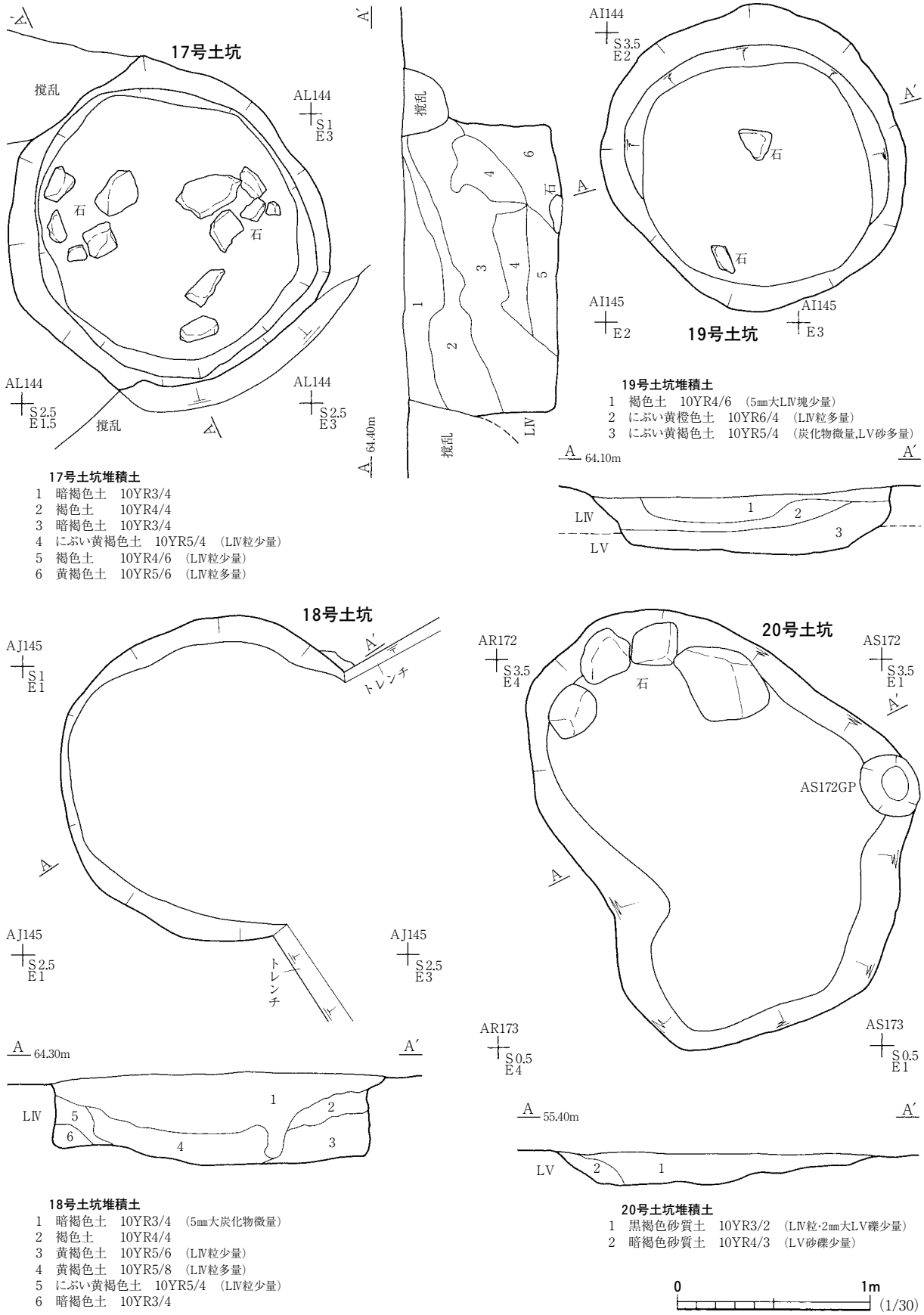
本土坑は規模及び形態から貯蔵穴である。時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えている。

19号土坑　ＳＫ19（図15，写真８）

本土坑は上位面３区のＡＩ144グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は円形である。規模は直径1.6ｍ，検出面からの深さは最大35㎝である。遺構内堆積土は３層に分けられ，ℓ２・３には，周壁の崩落に起因したＬⅣ塊またはＬⅤの砂を含んでいることから，自然堆積と考えている。底面縁から20㎝大の花崗岩の角礫が計２個出土している。

本土坑は出土遺物が少なく判断し得ないが，形態及び規模から縄文時代の貯蔵穴と考えている。



17号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
2　褐色土　10YR4/4
3　暗褐色土　10YR3/4
4　にぶい黄褐色土　10YR5/4　（LIV粒少量）
5　褐色土　10YR4/6　（LIV粒少量）
6　黄褐色土　10YR5/6　（LIV粒多量）

19号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/6　（5㎜大LIV塊少量）
2　にぶい黄橙色土　10YR6/4　（LIV粒多量）
3　にぶい黄褐色土　10YR5/4　（炭化物微量,LV砂多量）

18号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4　（5㎜大炭化物微量）
2　褐色土　10YR4/4
3　黄褐色土　10YR5/6　（LIV粒少量）
4　黄褐色土　10YR5/8　（LIV粒多量）
5　にぶい黄褐色土　10YR5/4　（LIV粒少量）
6　暗褐色土　10YR3/4

20号土坑堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/2　（LIV粒･2㎜大LV礫少量）
2　暗褐色砂質土　10YR4/3　（LV砂礫少量）

図15　17～20号土坑

20号土坑　ＳＫ20（図15・17，写真８）

本土坑は中位面６区のＡＳ172グリッドに位置する。検出面はＬＶ上面である。

平面形は不整楕円形で，南東縁は小穴に壊されている。規模は長軸約2.3m，短軸約1.9m，検出面からの深さは18㎝である。底面には，基盤層に含まれる花崗岩の円礫が表出している。

遺構内堆積土は２層に分けられる。堆積状況には，壁際からの流れこみの様相が認められることから，自然堆積と判断している。

遺物は，ℓ１からは，縄文土器片２点が出土し，図17に示した。図17－４は斜行縄文を施している。同図５は，隆帯で区画し，胴部に斜行縄文を施した後，隆帯上に押捺を加えている。

本土坑は形態及び規模から貯蔵穴と考えている。時期については図17－５が加曽利Ｂ式に併行することから，縄文時代後期中葉と考えている。

21号土坑　ＳＫ21（図16・17，写真８・９）

本土坑は，中位面６区のＡＲ・ＡＳ172グリッドにまたがって位置する。ＳＫ23と重複し，本土坑の方が新しい。検出面は，ＬＶ上面である。

平面形は不整円形である。規模は直径約1.4m，検出面からの深さは25㎝である。底面の西縁は，上端よりも数㎝外側へ抉りこんでいる。遺構内堆積土は２層に分けられる。このうち，ℓ１が土坑内の広い範囲を覆って堆積していることから，堆積状況は判断できなかった。

遺物は，ℓ１から縄文土器片４点が出土している。図17－６・７は深鉢の口縁部片は，口縁部下端に沈線を巡らしている。図17－８・９の深鉢胴部片は，縄文地に縦位の沈線文を施している。

本土坑は形態と規模から貯蔵穴と考える。時期は，出土遺物から縄文時代後期と考えている。

22号土坑　ＳＫ22（図16，写真９）

本土坑は中位面６区のＡＲ174グリッドに位置する。ＳＩ５と重複し，本土坑の方が古い。検出面は，ＬⅢｄ上面である。

平面形は不整楕円形で，上端の北・南東縁の一部はＳＩ５の小穴により壊され，東縁はＳＩ５調査時に壊してしまった。規模は長軸約1.5m，短軸約1.4m，検出面からの深さは50㎝である。底面の北東縁には，直径18㎝，深さ10㎝の小穴が掘りこまれている。遺構内堆積土は２層に分けられ，壁際から流れこんだ堆積状況が認められることから自然堆積と判断した。出土遺物は無かった。

本土坑は，規模及び形態から貯蔵穴の可能性が高い。時期については，ＳＩ５との重複関係から，縄文時代後期前葉またはそれ以前の所産と考えている。

23号土坑　ＳＫ23（図16・17，写真８・９）

本土坑は中位面６区のＡＲ172グリッドに位置する。ＳＫ21と重複し，本土坑の方が古い。検出

面はＬＶ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は長軸約1.1m，短軸約0.9m，検出面からの深さは15㎝以上である。遺構内堆積土は１層としたが，大きな花崗岩の途中で掘り止まり，遺構の底面までは至らなかった。堆積土は花崗岩をほぼ水平に敷きなおすため，人為的に埋め戻されたと判断している。

本土坑内には，最大幅80㎝，厚さ20㎝以上の白色花崗岩（図17－12）が，概ね水平になるよう埋まっていた。花崗岩はＬＶ中にあった自然石と判断している。石の上面は平滑で，その西側には直径１㎝前後の窪みがあり，大型の石皿として使用した可能性が高いと考えている。この他に遺物はなかったが，石皿はかなりの重量があったため，遺物として持ち帰ることを断念した。

本土坑は，土坑の掘削時に表出した大きな自然石を水平に据え直し，石の上面を作業面として利用していた可能性が考えられる。時期は重複関係から縄文時代後期と考えている。

24号土坑　ＳＫ24（図16・17，写真９）

本土坑は中位面６区のＡＯ・ＡＰ168グリッドにまたがって位置する。検出面はＬＶ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は長軸約１m，短軸約90㎝，検出面からの深さは18㎝である。遺構内堆積土は２層に分けられ，レンズ状の堆積状況であることから，自然堆積と判断している。

遺物は，ℓ１からは縄文土器片１点が出土している。図17－10は胴部に斜行縄文を施している。

本土坑の時期と機能については，出土遺物が少なく，形態等にも特徴がないことから不明である。

25号土坑　ＳＫ25（図16，写真９）

本土坑は，中位面６区のＡＰ・ＡＱ174グリッドにまたがって位置する。検出面はＬＶ上面である。ＳＩ３と重複するが，ＬＶ中に礫が多く，新旧を確認できなかった。

平面形は楕円形である。規模は長軸約1.3m，短軸約1.2m，検出面からの深さは55㎝である。遺構内堆積土は単一層で，堆積状況についての判断はできなった。遺物は出土しなかった。

本土坑は，規模および形態から判断して貯蔵穴の可能性が高いと考えている。時期についてはＳＩ３との重複関係から，縄文時代後期前葉と考えている。

26号土坑　ＳＫ26（図16・17，写真９）

本土坑は中位面６区のＡＲ174グリッドに位置する。検出面はＬⅢｄ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は長軸約1.4m，短軸約1.3m，検出面からの深さは25㎝である。遺構内堆積土は，単一層で，人為または自然堆積かの判断はできなかった。

遺物は，土坑内から縄文土器片が１点出土している。図17－11の深鉢胴部片は，磨消縄文手法で文様を描いている。

本遺構は不整楕円形の土坑で，形態に特徴が無く性格は不明である。時期は出土した図17－11が大木10式に併行することから縄文時代中期末葉と考えている。（阿　部）

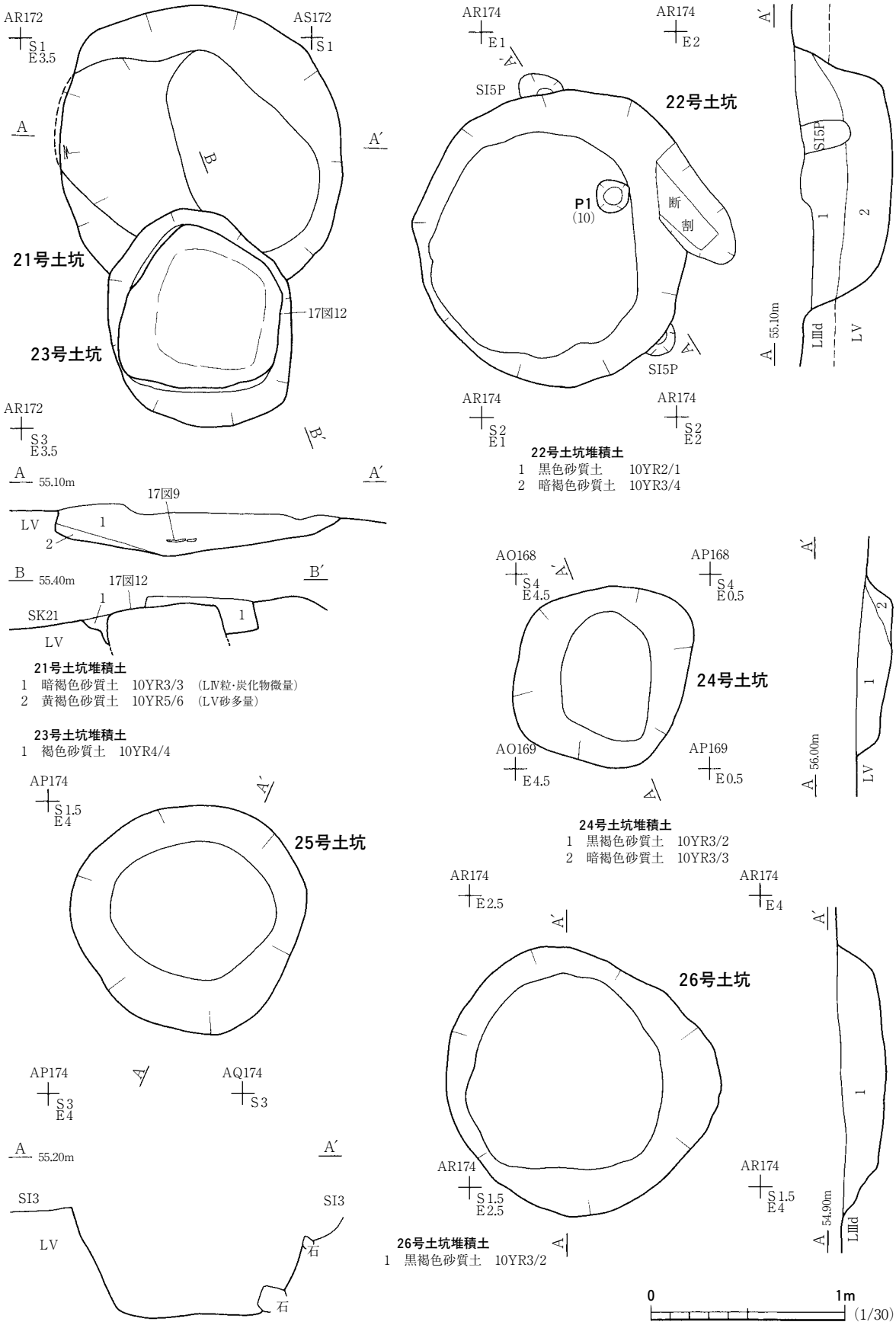

AR172
S1
E3.5
AS172
S1
A
A′
B
B′
21号土坑
23号土坑
17図12
AR172
S3
E3.5
A
55.10m
A′
17図9
LV
1
2
B
55.40m
B′
17図12
1
SK21
LV
1
21号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/3　（LⅣ粒･炭化物微量）
2　黄褐色砂質土　10YR5/6　（LV砂多量）
23号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10YR4/4
AP174
S1.5
E4
A′
25号土坑
AP174
S3
E4
AQ174
S3
A
55.20m
A′
SI3
SI3
LV
石
石
AR174
E1
AR174
E2
A′
SI5P
22号土坑
P1
(10)
断
割
SI5P
AR174
S2
E1
AR174
S2
E2
22号土坑堆積土
1　黒色砂質土　10YR2/1
2　暗褐色砂質土　10YR3/4
SI5P
1
2
A
55.10m
LⅢd
LV
AO168
S4
E4.5
AP168
S4
E0.5
24号土坑
AO169
E4.5
AP169
E0.5
24号土坑堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/2
2　暗褐色砂質土　10YR3/3
2
1
A
56.00m
LV
AR174
E2.5
AR174
E4
26号土坑
AR174
S1.5
E2.5
AR174
S1.5
E4
26号土坑堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/2
1
A
54.90m
LⅢd
0
1m
(1/30)

図16　21～26号土坑

1 (SK14ℓ3)V3b
2 (SK18ℓ1)V2
3 (SK18ℓ1)V5e
4 (SK20ℓ1) V5c
5 (SK20ℓ1) V5d
6 (SK21ℓ1) V5b
7 (SK21ℓ1) V5b
8 (SK21ℓ1) V4
9 (SK21ℓ1)V4
10 (SK24ℓ1)V5c
11 (SK26ℓ1)V3b
0 10cm (1/3)
12 (SK23ℓ1)
長 ：41.1cm
幅 ：36.7cm
石質：細粒花崗岩
凹み・敲打範囲
0 20cm (1/8)

図17　土坑出土遺物

第４節　集　石　遺　構

１号集石遺構　ＳＳ１（図18，写真９）

本遺構は中位面６区南端のＡＲ173・174グリッドに位置する。本遺構の南側にＳＩ５が隣接している。検出面はＬＶ上面である。規模は長軸1.1m，短軸0.9m，検出面からの深さ25cmの楕円形状堀形の上層に，20cm前後の花崗岩や石英班岩などの円及び角礫が12個集められていた。12個の礫のうち，南西端にある長さ25cmほどの扁平な礫は，ほぼ垂直に立てられ，断面図（図18左下Ａ－Ａ’）に示すように，掘形内に堆積したℓ１で埋められていることから，東側の礫と同時に造られたことも確認した。

掘形内の堆積土は２層に分けられる。掘形内からは図18－１の深鉢口縁部片が１点出土した。

遺構については，掘形の上層から礫がまとまって出土することや，西端の礫が立っていた状況から判断して，墓の可能性も考えている。時期については，遺物が少ないことから，特定することは難しいが，周囲の遺構の分布状況から，縄文時代後期と考えている。（阿　部）

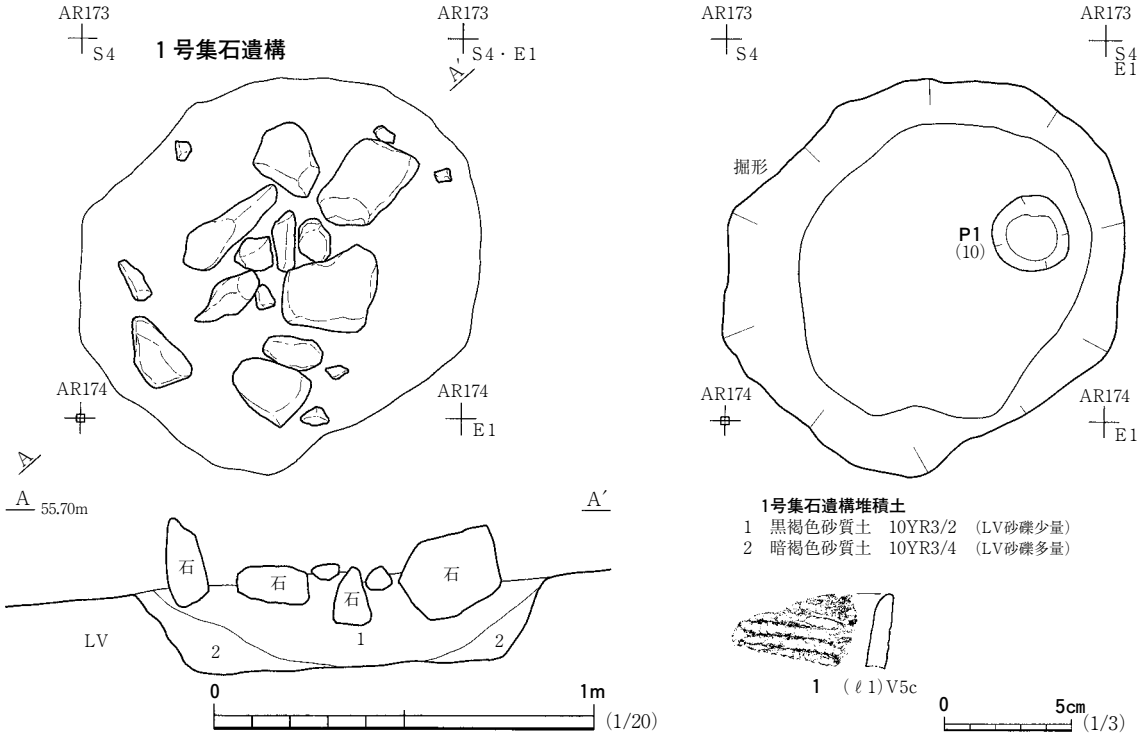


図18　１号集石遺構，出土遺物

第５節　土器埋設遺構

１号土器埋設遺構　ＳＭ１（図19，写真６・10）

本遺構は中位面６区，ＡＲ174グリッドに位置する。検出面はＬⅢｄ上面で，ＳＩ５の床面と同じ高さで土器が埋設されていた状況から，ＳＩ５に伴っていた可能性が高いと考えている。掘形の平面形は楕円形である。掘形の規模は，長軸65㎝，短軸55㎝，検出面からの深さは15㎝を測る。掘形の中央部には，底部を欠いた深鉢形土器を縦位に埋設していた。掘形内堆積土はＬⅢｄを基調とした単一層である。

図19－１の埋設土器は，口縁部に沿って横位の隆帯を巡らせ，外面に斜行縄文を施している。時期については，本遺構のＳＩ５と同時期であることと，出土遺物から，縄文時代後期前葉と考えている。

（阿　部）

第６節　遺物包含層

道平遺跡の２次調査では，中位面６区の南側において遺物包含層が形成されていた。調査の段階で基本土層をⅠ～Ⅴの５層に区分し，調査を進めた。これらの層については，第３編第２章第１節で報告している。以下では，包含層から出土した遺物について報告するが，表土や撹乱穴等の中から出土した遺物についても本節で扱う。

遺物の出土状態　（図20）

中位面６区の遺物包含層からは，合計2,545点の土器が出土している。このうち主体を占めるのはⅤ群とした縄文時代後期前半のもので，Ⅳ・Ⅵ群としたものは50点ほどである。

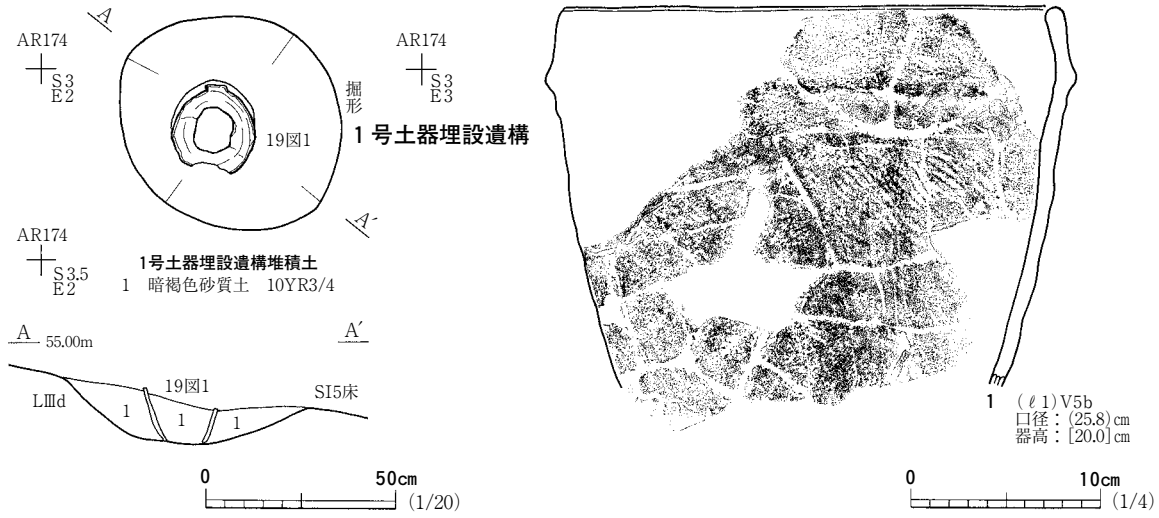


図19　１号土器埋設遺構，出土遺物

堆積層ごとの出土量は，ＬⅡが1,463点，ＬⅢｄが660点である。ＬＩを除いた平面的な土器の出土量を図20に示した。最も出土量が多いのはＡＰ176グリッドの592点で，中位面の斜面肩部付近にその分布の中心を持つようである。

遺　　物　（図21～24，写真10）

Ⅳ群土器　図22－１・３は大木10式土器で，磨消縄文手法で文様を描いている。図22－16～18・21は加曽利Ｅ式系の土器で，口縁部下端に横位の隆線が巡っている。

Ⅴ群土器　Ⅴ群の器形は６類の一部を除いて大半は深鉢形土器である。口縁部に付く突起を１類とし図21－１～５が該当する。図21－１・２は「Ｃ」字状・棒状の突起である。同図３～５は無文地に盲孔と沈線が施された突起である。

２類は，図21－６・７で縄文地に沈線でいわゆる蕨手状の文様を描いている。

３類はａ・ｂ種に区分した。ａ種は図21－９～15，ｂ種は図21－16～28，図22－２である。ａ種のうち，図21－９～15・胴部の区画内に縦位の無文帯が配される。ｂ種は幅の狭い施文帯で文様描くものである。図21－16～19・23は称名寺式土器で，16・18にはスペード状らしい図形が描かれている。

４類は図22－４～７・９で，多条の沈線で文様を描いている。９は狭い口縁部に同心円を描いている。

５類は粗文の土器を一括した。本類はａ～ｆ類に区分したが，Ⅴ１・Ⅴ２類との区分については不分明なものもある。図22－10～13は横位の沈線が巡る「く」字状に屈曲する口縁

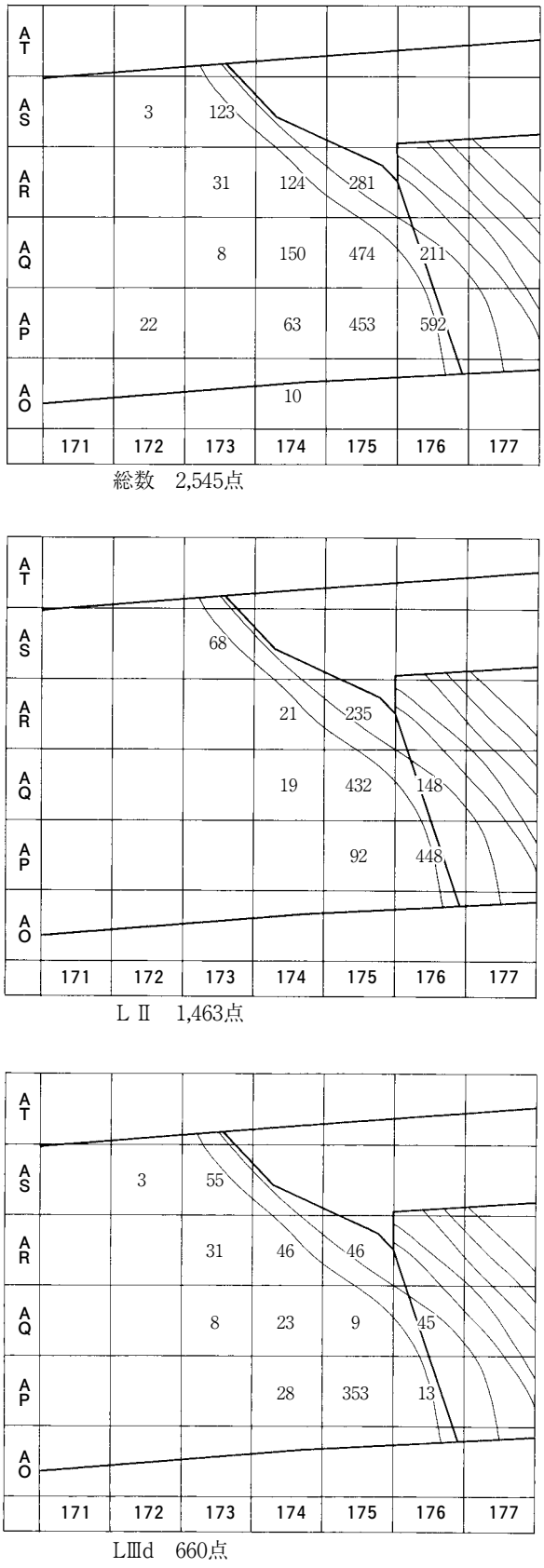


図20　グリッド別土器出土点数

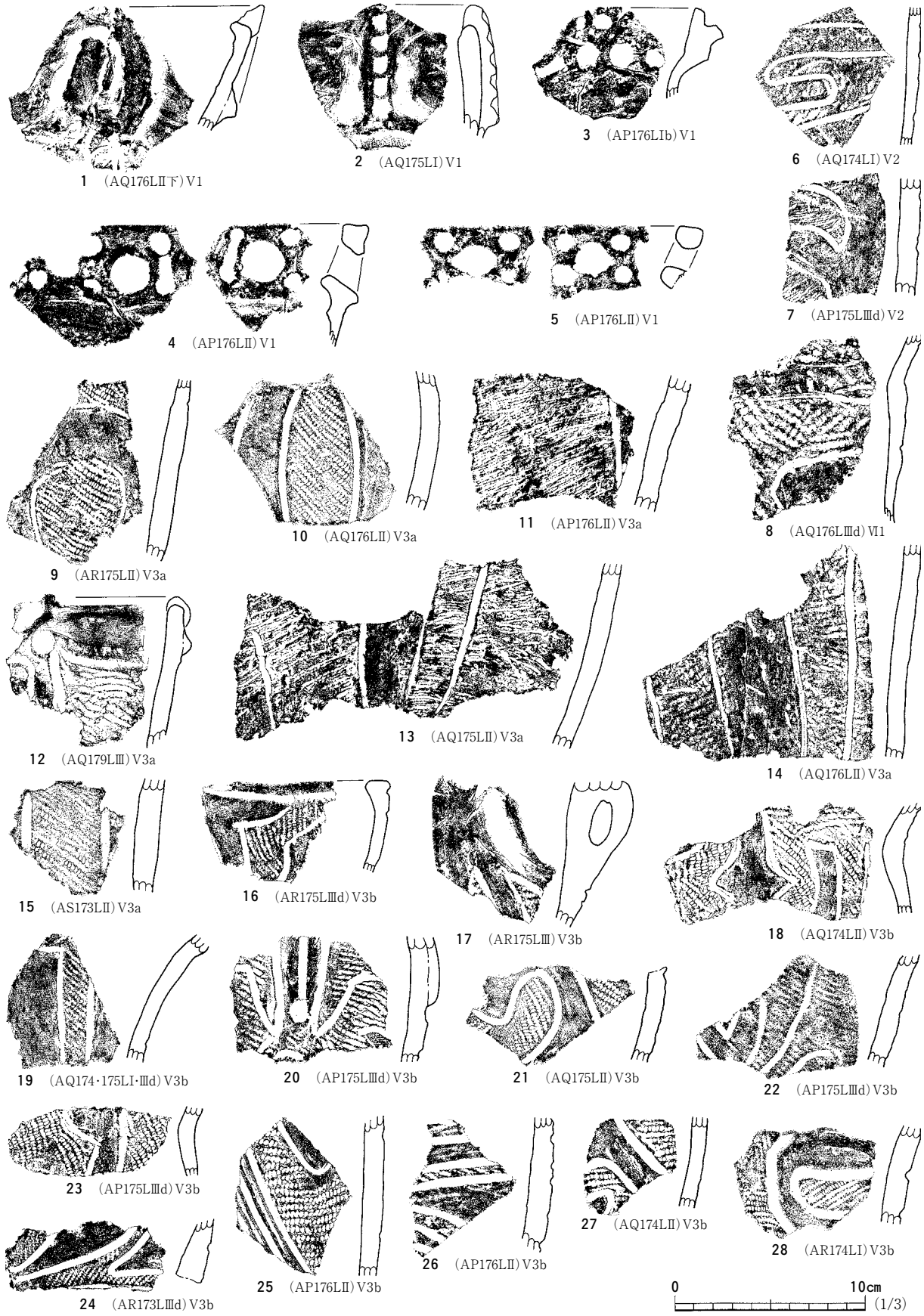


図21　遺物包含層出土遺物（１）

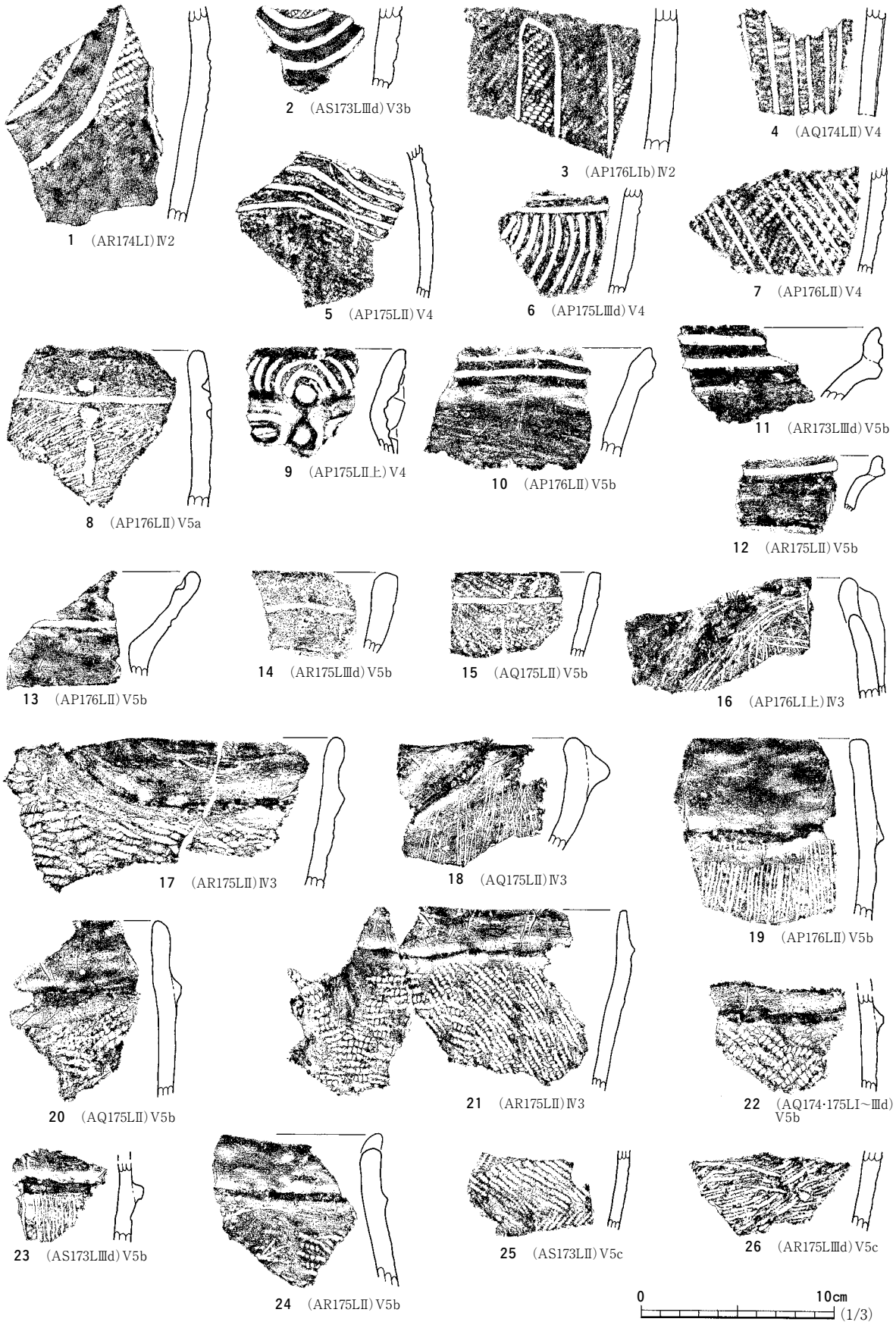


図22　遺物包含層出土遺物（２）

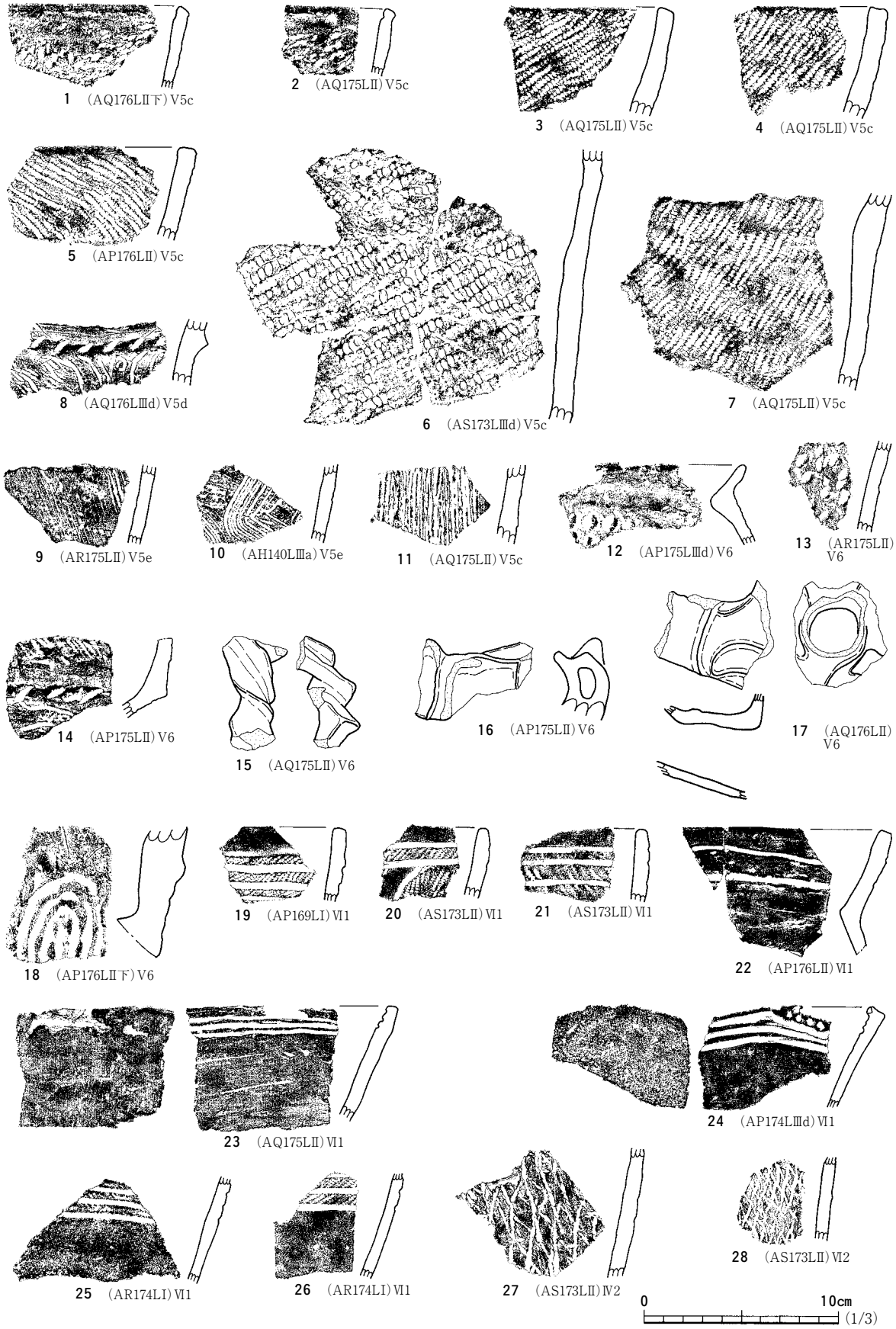


図23　遺物包含層出土遺物（３）

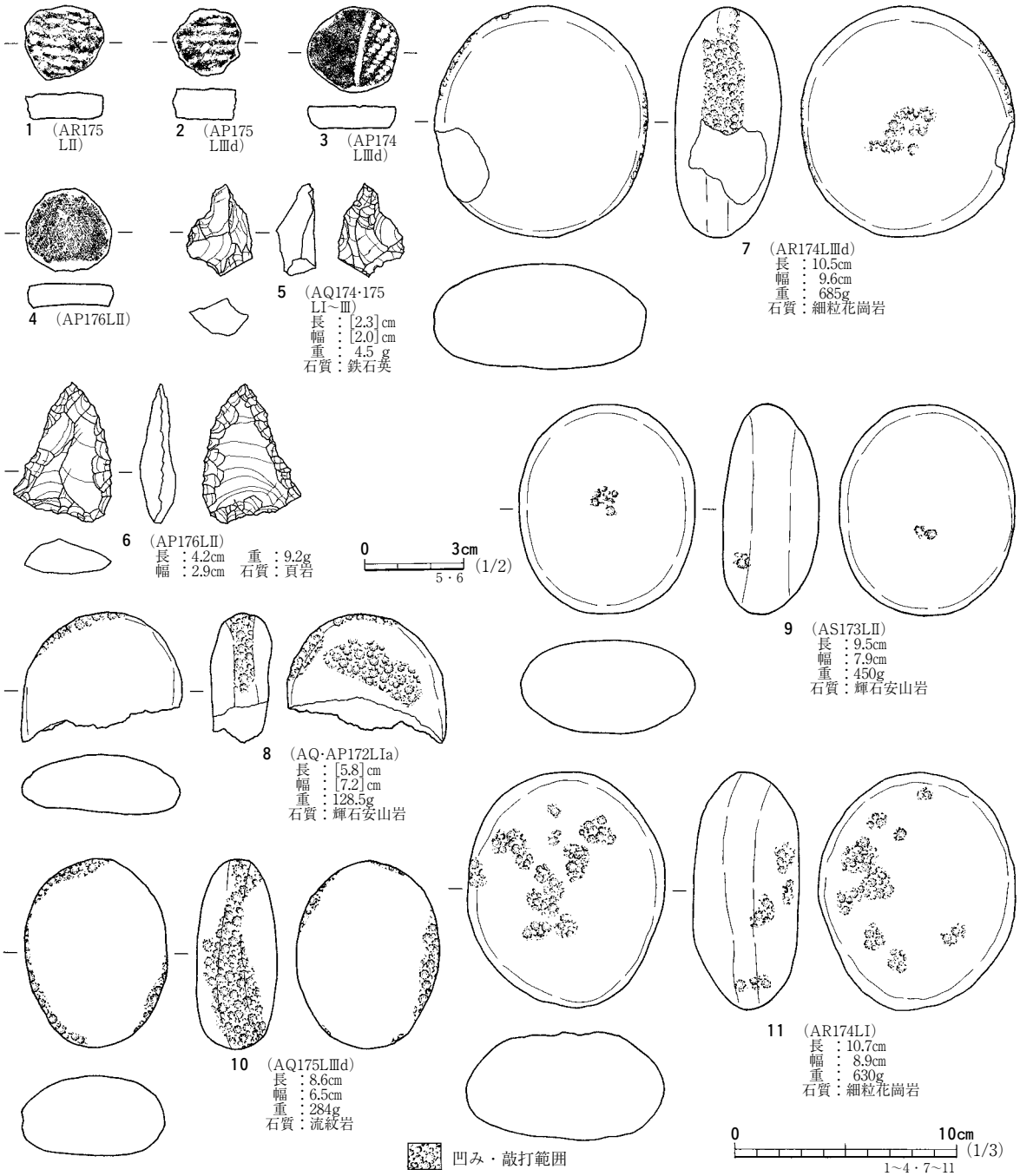


図24　遺物包含層出土遺物（４）

部である。図22－19・20・22～24は口縁部下端に横位の隆帯を巡らせている。図22－25・26，図23－１～７は器面に斜行縄文を施している。図23－６は深鉢の胴部片で，縄文を横位に回転させている。図23－８は押圧を加えた隆帯を横位に巡らせている。図23－10・11は器面に条線文を施している。

６類は図23－12～18である。同図12は壷形，同図18両耳壷の把手，同図17は注口土器で同図16も17と同一個体であると考えている。同図12・13は器面に列点文を施すことから三十稲葉式系の土器である。

Ⅵ群土器　１類は図21－８，図23－19～26である。図21－８は加曽利Ｂ式系の土器で，磨消縄文手法で「Ｃ」字状の縄文帯を胴部に配している。図23－19～26は堀之内２式土器で，同図19～21・25・26は無文地に横位の縄文帯を配している。同図23・24は浅鉢で，口縁部内面には端部に平行そた沈線を施している。

２類は図23－27・28で，器面に網目状撚糸文を施している。

土製品　図24に示した４点がすべてである。同図１～４は土器片を用いた土製円盤である。

石器　図24に示した７点がすべてである。同図５は石鏃の未製品で，同図６は素材の厚みを取りきれていない不定形の石鏃である。同図７～11は磨石・凹石である。同図７・９の表面中央には窪みが，側面は敲打により表皮が剥げている。（阿　部）

参考文献

福島県教育委員会　1997　『福島県内遺跡分布調査報告３』

2003　『福島県内遺跡分布調査報告９』

2005　『福島県内遺跡分布調査報告11』

渡辺一雄・大竹憲治編　1983　『道平遺跡の研究　福島県大熊町道平における縄文時代後・晩期土器群の調査』大熊町教育委員会

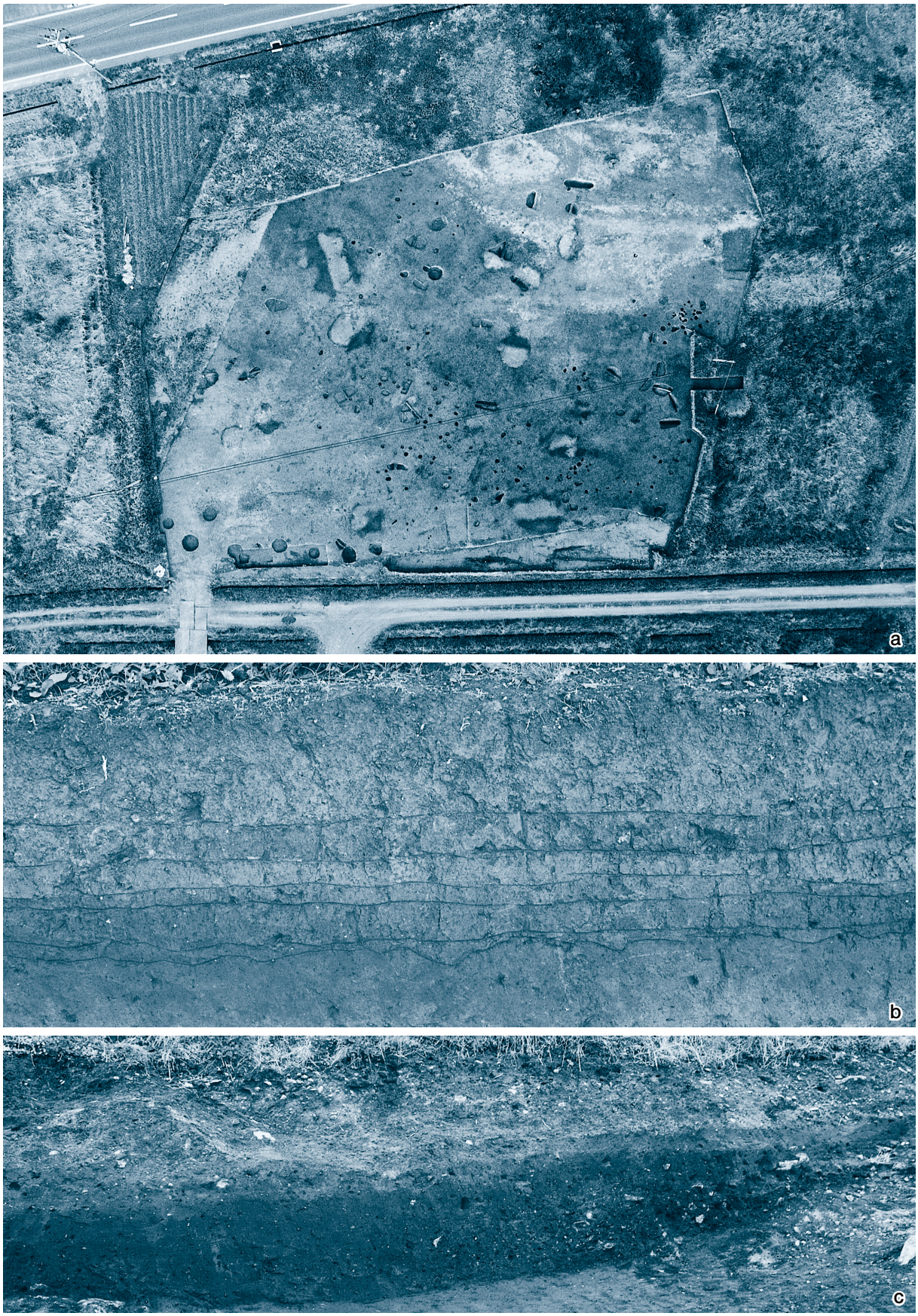
山内　幹夫ほか　2003　『常磐自動車道遺跡調査報告37』　福島県教育委員会

松本　茂ほか　2005　『常磐自動車道遺跡調査報告41』　福島県教育委員会

「まとめ」については「第４編第３章」中で後述した。

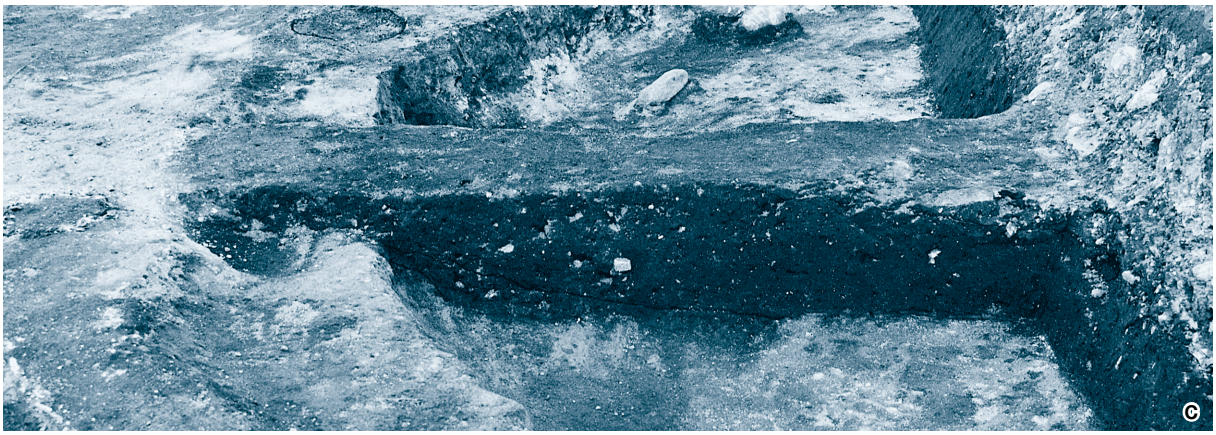
1　調査区全景（1）

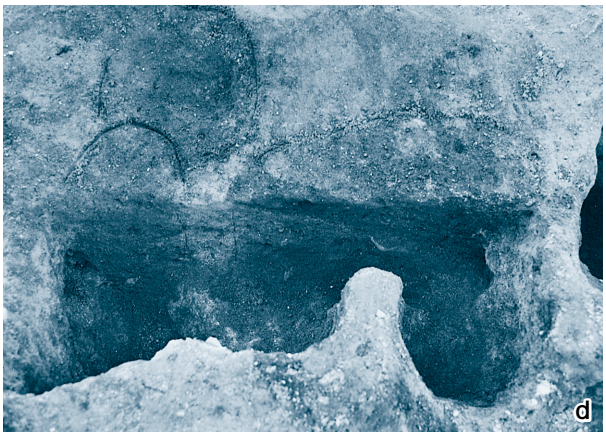
a　調査前調査区近景（南西から）
b　調査区遠景（東上空から）

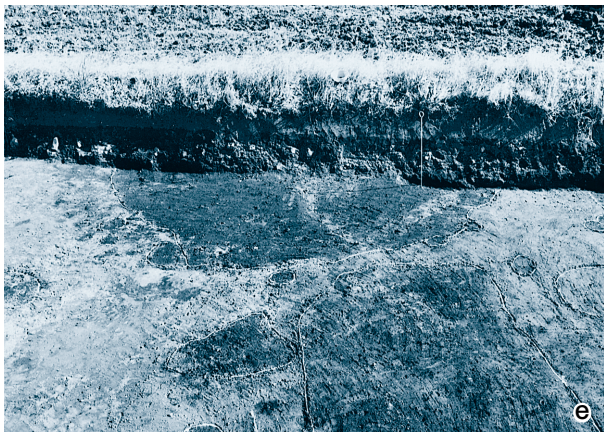


2　調査区全景（２），基本土層

a　調査区遠景（南上空から）
b　基本土層１（西から）
c　基本土層２（東から）

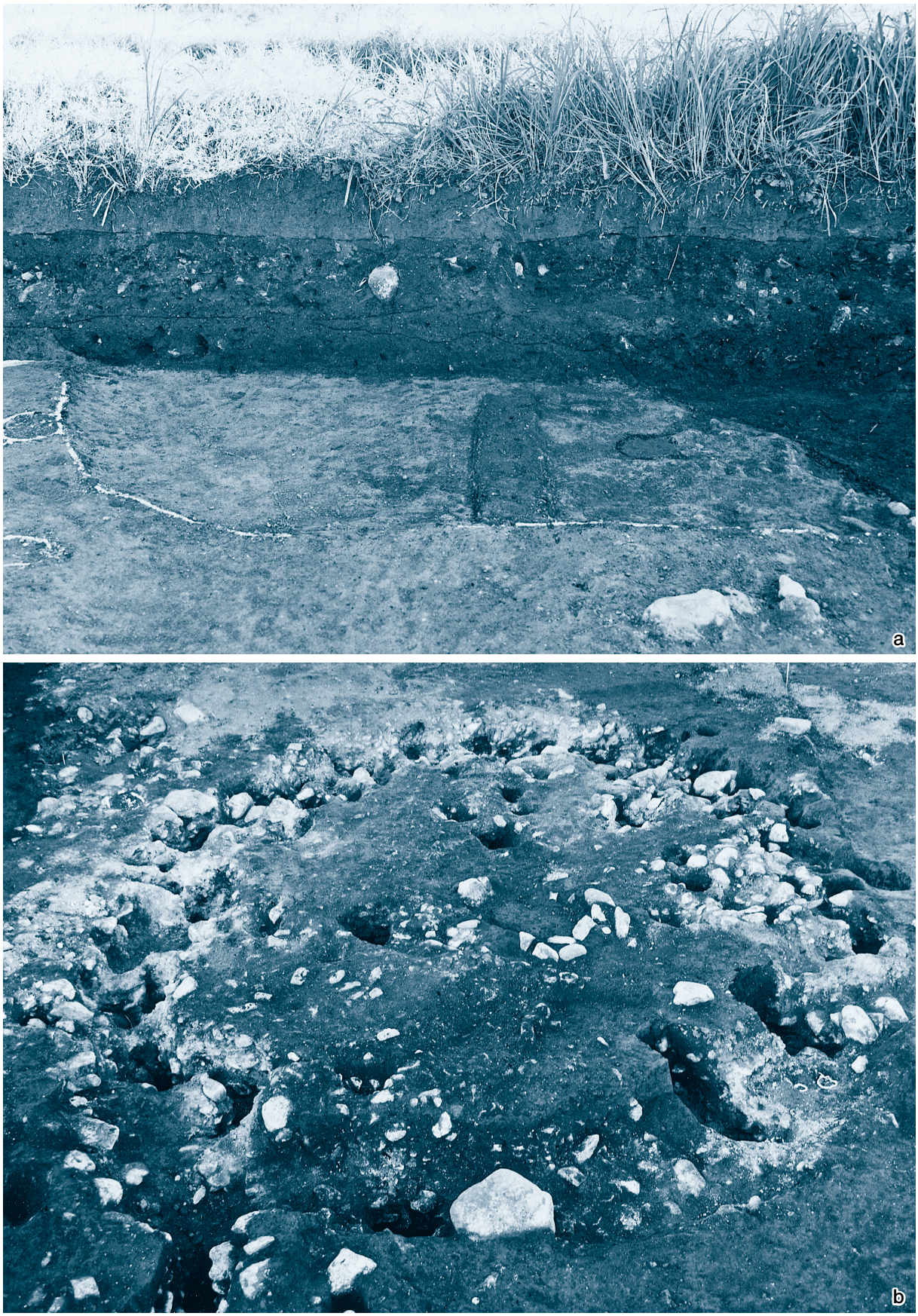






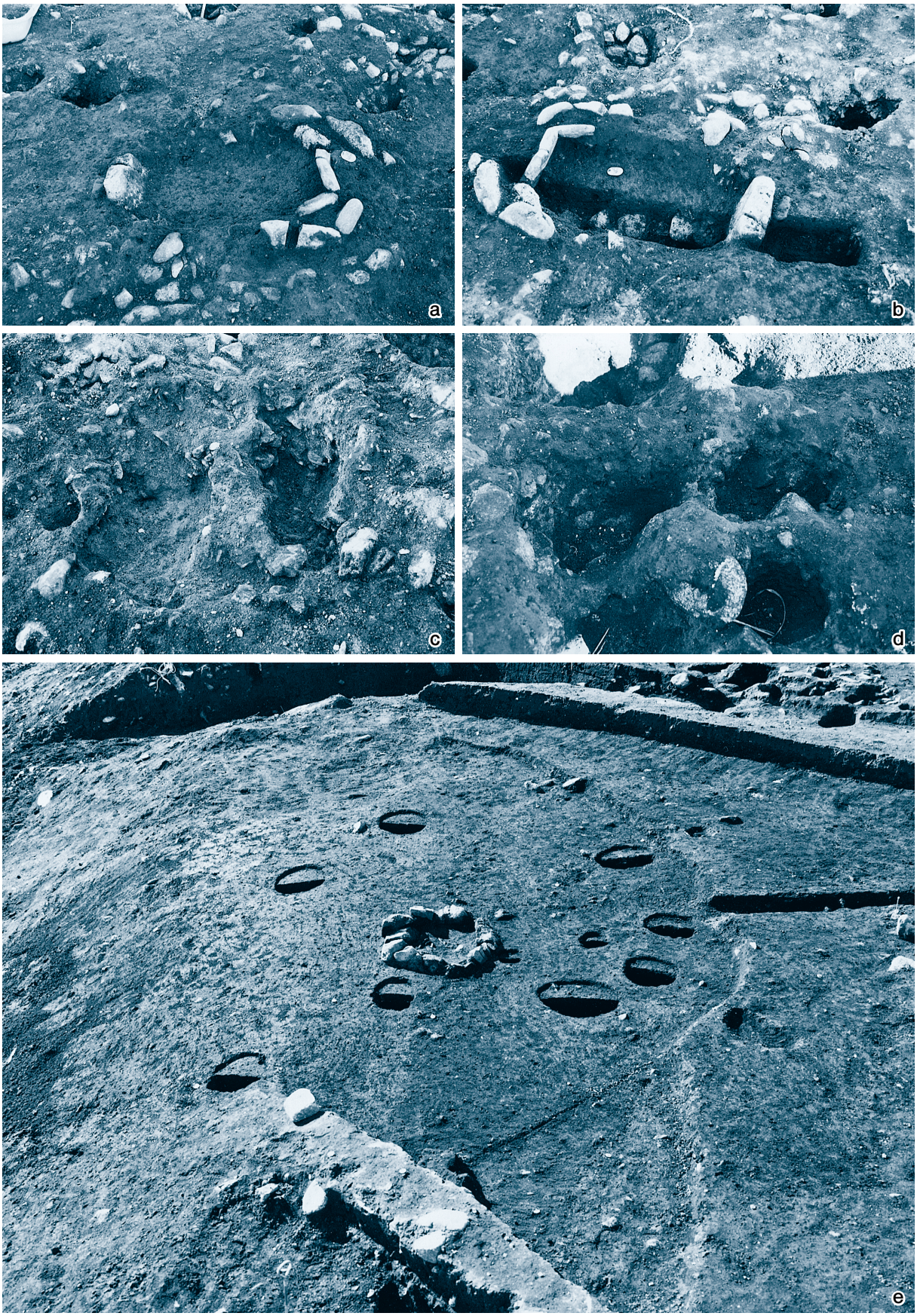
3　１・４号住居跡

a　１・４号住居跡全景（西から）
b　１・４号住居跡土層（西から）
c　１・４号住居跡土層（南から）
d　４号住居跡Ｐ土層（東から）　**e**　１・４号住居跡検出状況（西から）



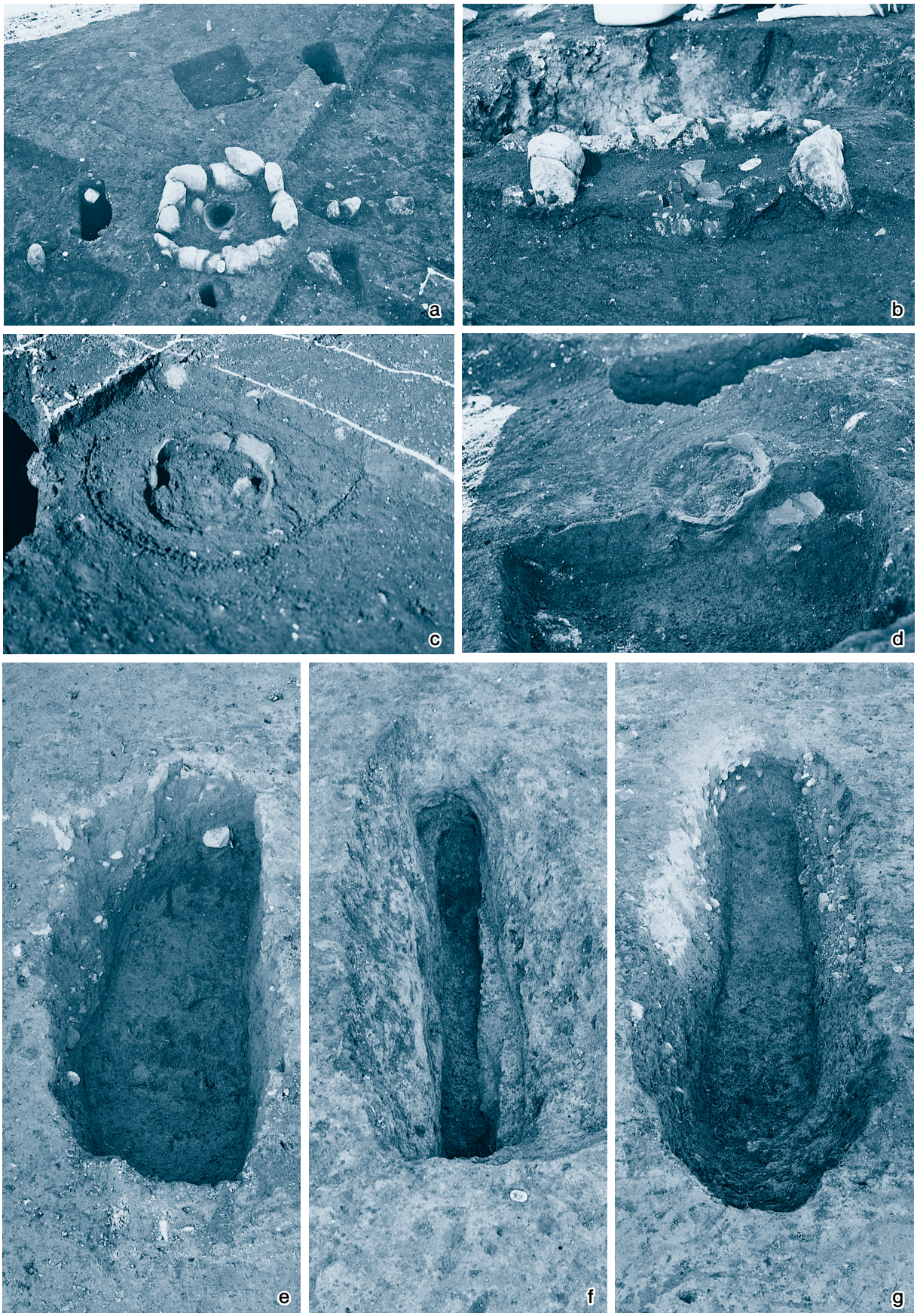
4　２・３号住居跡

a　２号住居跡全景・土層(西から)
b　３号住居跡全景(南から)



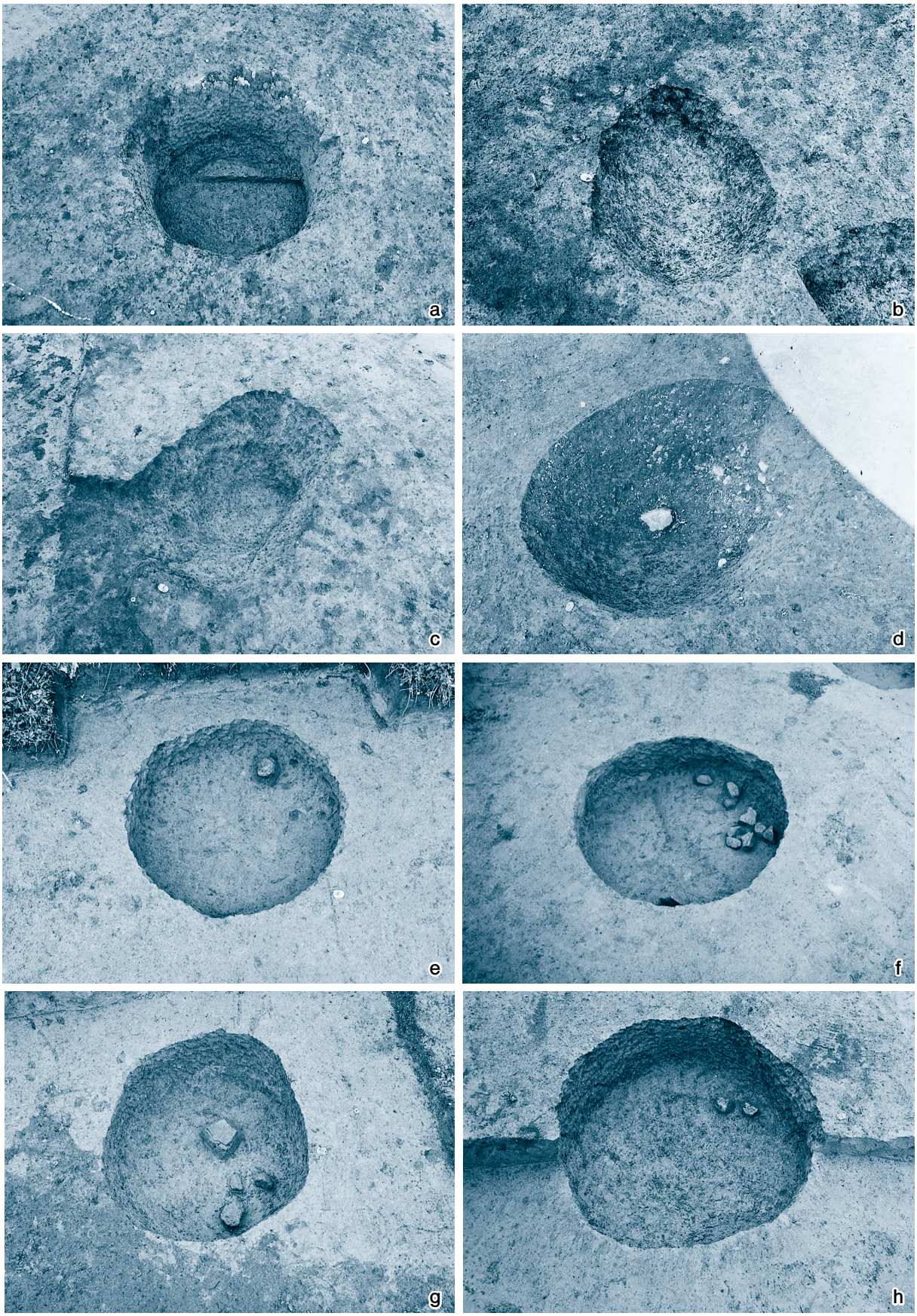
5　３・５号住居跡

a　３号住居跡炉跡全景（南西から）　**b**　３号住居跡炉跡土層（北東から）
c　３号住居跡入口部全景（南東から）　**d**　３号住居跡Ｐ土層（西から）
e　５号住居跡全景（東から）



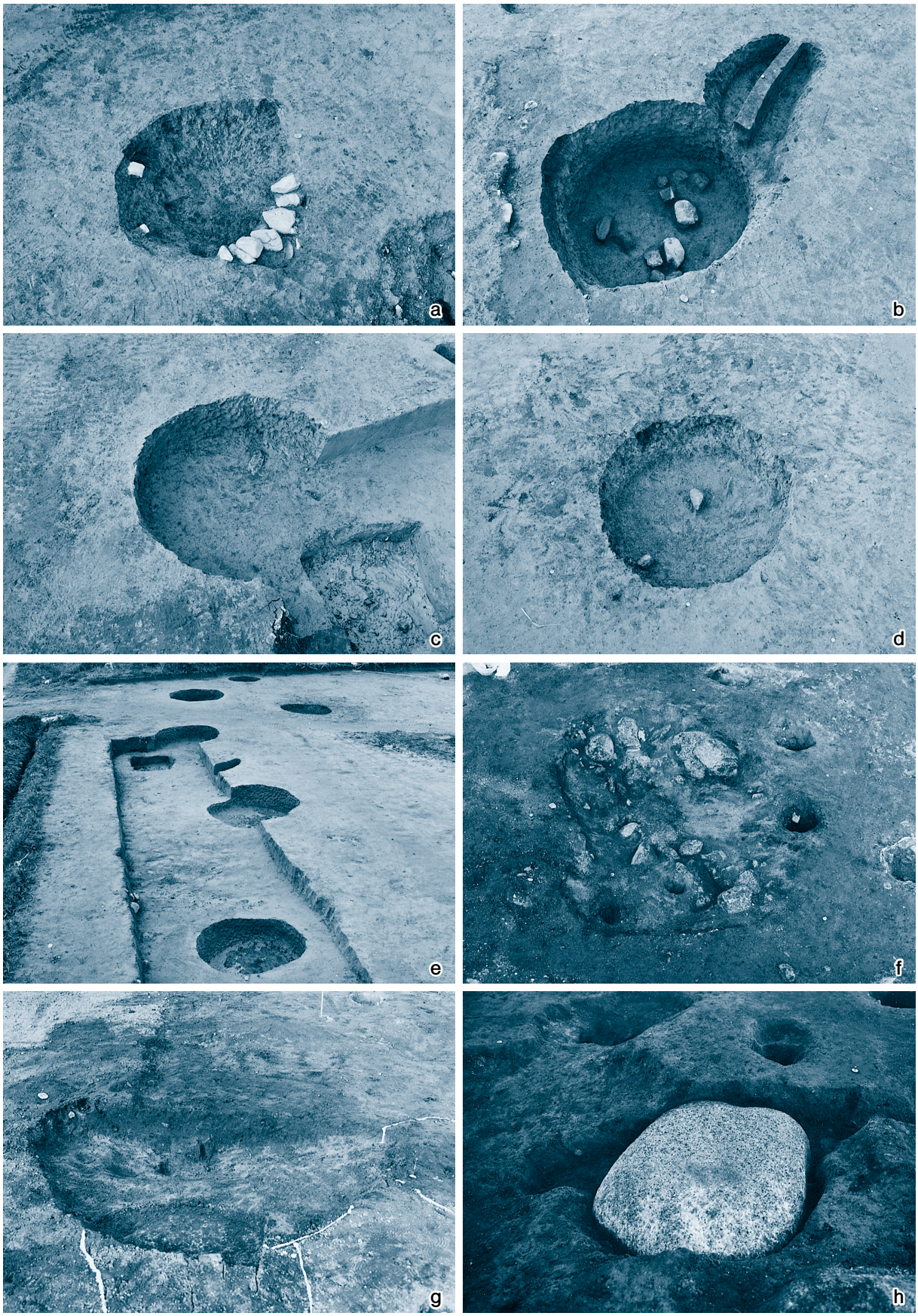
6　５号住居跡，１号土器埋設遺構，５・８・11号土坑

a　５号住居跡炉跡・１号土器埋設遺構全景(北東から)　b　５号住居跡炉跡土層(南から)
c　１号土器埋設遺構検出状況(南東から)　d　１号土器埋設遺構土層(東から)
e　５号土坑全景(南から)　f　８号土坑全景(西から)　g　11号土坑全景(西から)



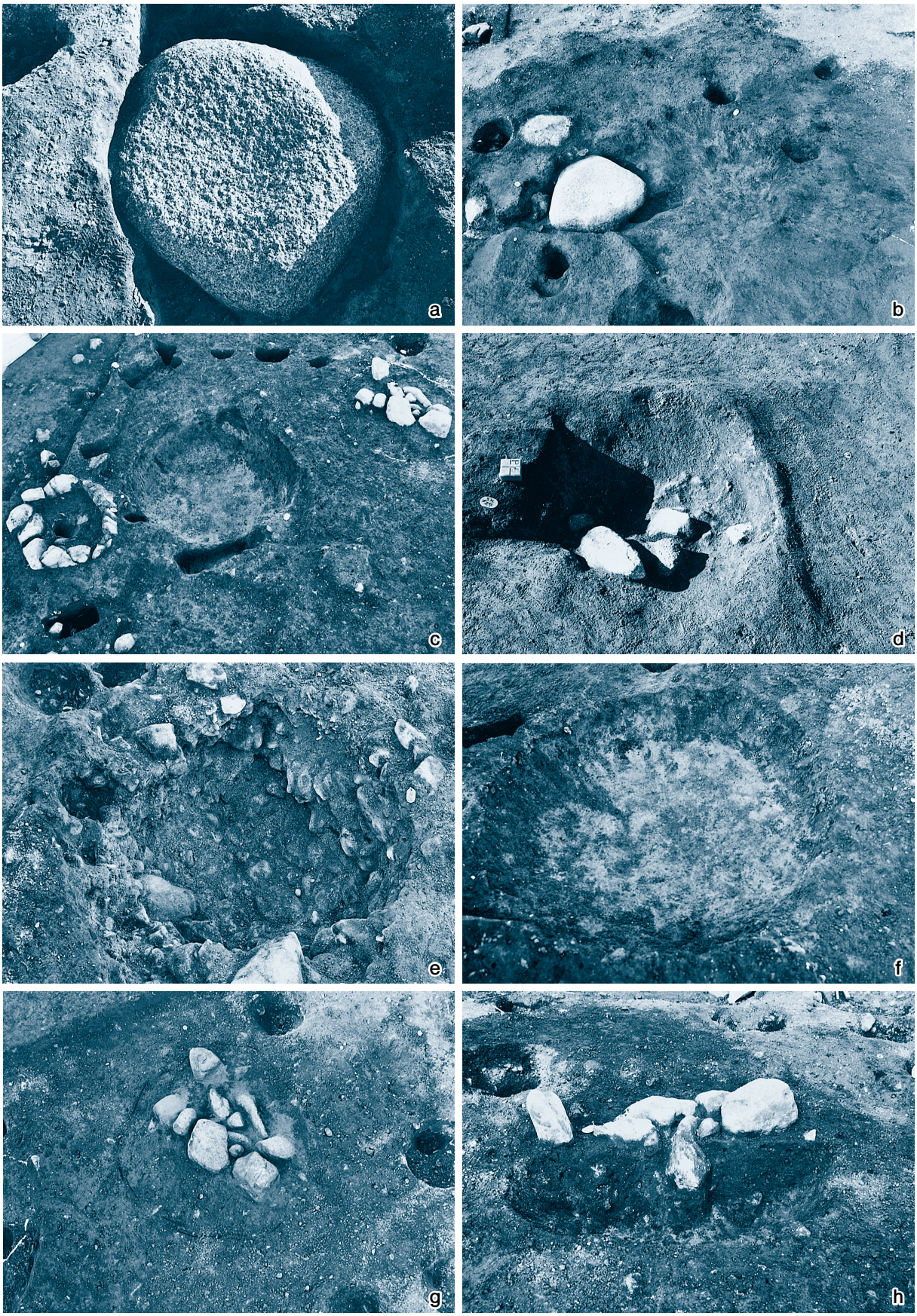
7　6・7・9・10・12～15号土坑

a　6号土坑全景(南から)　**b**　7号土坑全景(南から)
c　9号土坑全景(南から)　**d**　10号土坑全景(南から)
e　12号土坑全景(東から)　**f**　13号土坑全景(東から)
g　14号土坑全景(東から)　**h**　15号土坑全景(南から)



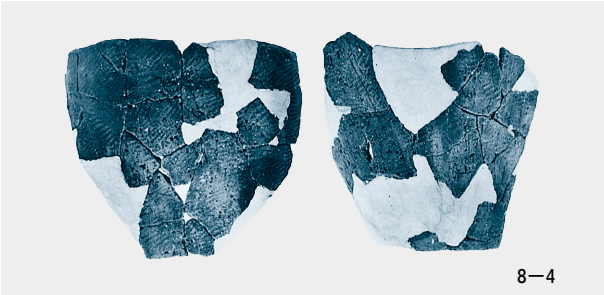
8　16～21・23号土坑

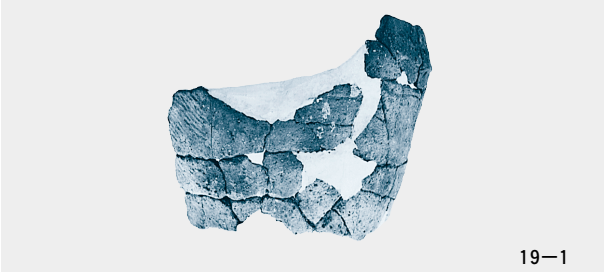
a　16号土坑全景（東から）
b　17号土坑全景（東から）
c　18号土坑全景（南から）
d　19号土坑全景（南から）
e　12～18号土坑全景（東から）
f　20号土坑全景（南から）
g　21号土坑土層（南から）
h　23号土坑土層（西から）

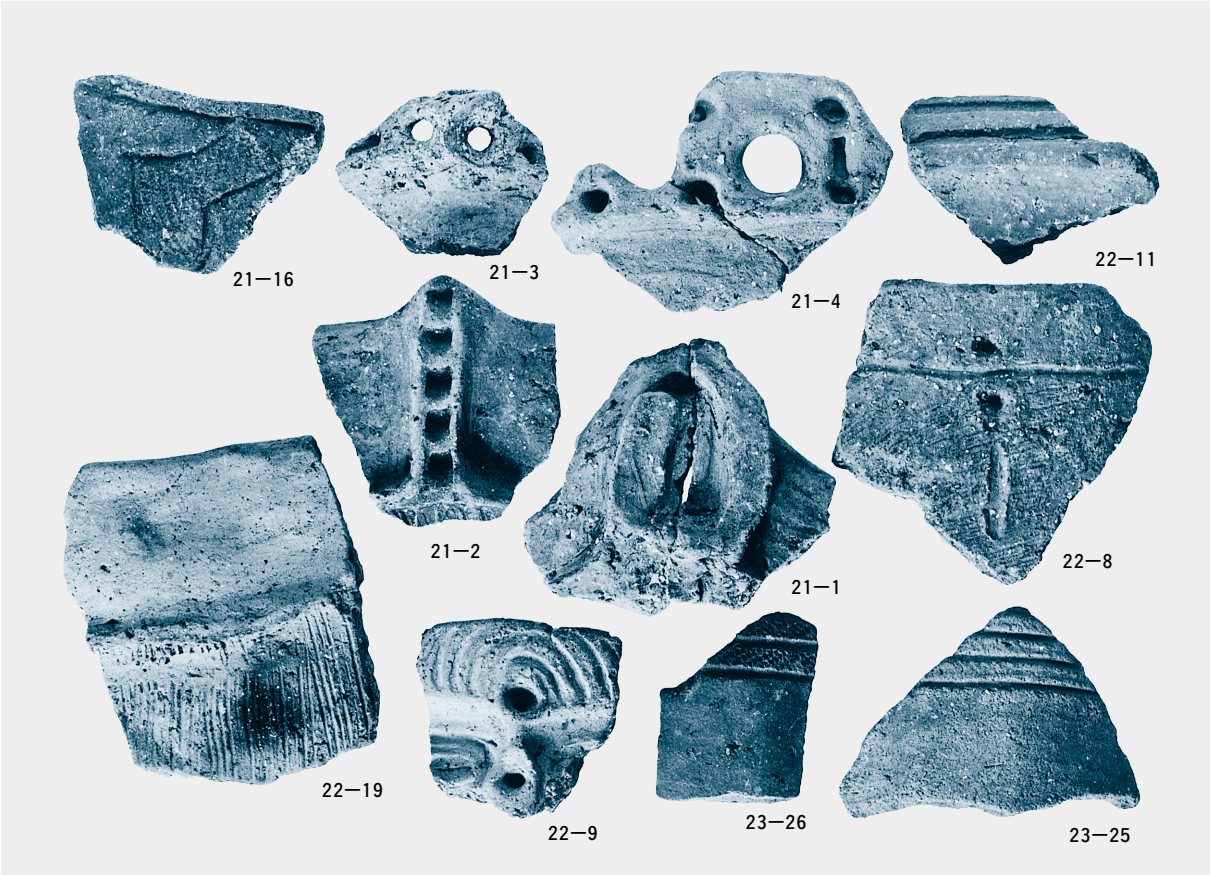


9　21～26号土坑，１号集石遺構

a　23号土坑内石皿検出状況（北から）
b　21・23号土坑全景（東から）
c　22号土坑全景（東から）
d　24号土坑全景（東から）
e　25号土坑全景（北から）
f　26号土坑全景（東から）
g　１号集石遺構検出状況（東から）
h　１号集石遺構土層（南から）







10　出土遺物